

2-146

88-304



藤村日記

藤村日記

東京博文館發行





キリストの死を拜する諸聖者
(アンジェリコ・ソレンツェの聖マルコ寺)

(九六—九七頁参照)



聖母その他の聖者(アンジェリコ筆・聖マルコ會議堂壁畫の一部分)

(九六頁参照)

序言

三月三十一日、この日の来る毎に、始めて外國に向つて本國を辭した時を思ひ出す。九年前のこの日、友人等に送られ横濱を解纜して、その夕、伊豆の大島が夕暮れの空に影の如くに横はるのを眺めた頃、この海樓に来て暮れ行く空の海面を望むで、離別の愁に沈んでくれた友があつた。三年の後に歸朝してこの地に來た時には彼れは既に世に亡き人となつて骨を對岸の山に埋めて居た。思ひ出の今日復こゝに來て、イタリアに摘んだ花の日記を整へつゝ、彼れが「何なりとも趣味ある日記を持ち歸へれ」といつた言を思ひ出す。この日記は固より彼れの望みに副ひ得ないが、旅行中毎日の見聞所感を書き留め得たゞけでも、彼れに對する誠又彼れが友情の賜である。

この日記の稿を整へるために、清見潟に來て亡友を思ふと共に、又

花 つ み 日 記

去年の旅行をさせてくれたカーン氏(M. Albert Kahn)に對する感謝をも表しなければならぬ。氏が世界巡回資金(La bourse pour la tour autour du monde)を諸國の大學に寄附し、學者をして世界を巡つて諸國民の事情を研究せしむる様にせられた趣意は實に人道のため世界平和のためである。各國民の事情が學者の研究で互によく知れ亘り、各國の學者間に互に同情が出来たならば、終には國際の誤解を防いで戦争などの慘禍を避け得る様にもならう。こゝにいふ理想に出た寄附に依つて再度の外遊をなし得た自分は、宗教や文明について視察し研究すると共に、親しく接した人々に心情を打ちあけて語り、東西文明は異つても人情は同じであるといふ事を少しでも示したいと考へた。それと同時に西洋の文明や人情についても見た事を本國の同胞に報告するのを義務と考へる。この考で一年餘の旅行中書き集めた日記や書類は甚だ多いが、今一時にそれを公にし兼ねるた

序

め、先づ手始めに、南歐の美國イタリアの旅を主とした、この一冊を公にする。イタリアの野邊スコットの山地に摘んだ花の數々は皆自分にとつてゆかしい思ひ出であるが、若しこの花つみの跡を見て「世間に鬼はない」との眞理に思ひ到る讀者を得たならば、カーン氏に對する誠意の萬一ともならう、又亡友に對する思慕を表する所以にもならう。この日記以外に考へたり見たりした結果は日本とフランスと兩方で追々に發表したい。

今夜、風は静かに月おぼろ。

清見、月もおぼろに春の夜の

夢もまどかに眠る海山。

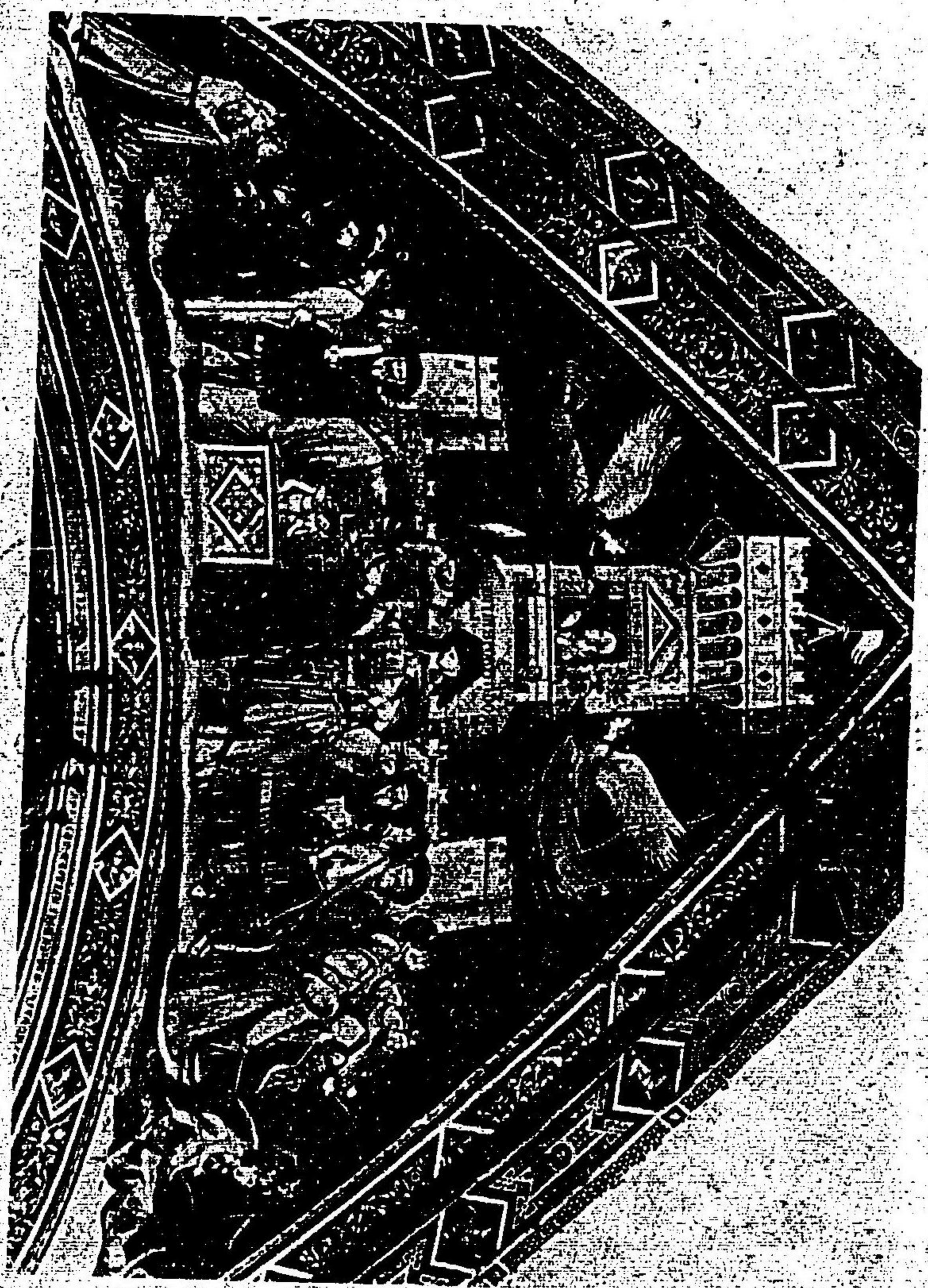
この境に在つて花のイタリアを追懐すると、恍として夢を思ひ出す感がある。異國の春に遇つては故國の山水を偲びこゝに歸つてその時の日記を見ては又南歐の花の野邊を慕ふ。思慕、追懐、この悲

しい様で楽しい物思ひを味ひ得るのは亡友と恩人との賜である。

清見海にて

著 者

四十二年三月三十一日



貞潔の鐘 (シャクトー華、
アランの寺、天井壁畫の一部分)

(中央の塔内に貞潔、前には貞潔の洗禮、右には天使
等が悪魔を追い、左には聖フランシスが淨行の人を
迎ふ、二四三頁参照)

目次

花つみ日記(四月五月)

ゴットハルトの雪

四月五日。雪中の上り

四月六日。山陰の別れ

湖上の春

四月六日。山陽の花、イタリアの空

四月七日。遠方の友

四月八日。湖邊の花摘み

四月九日。コモの湖上

四月十日。山上の眺め、學校、音樂、家庭

四月十一日。ロカルノ、聖母堂、代議士

一
三
三
一五
一七
一七
二一
二二
二八
三六
四一

四月十二日。佛誕會の茶會……………四七

四月十三日。イギリス人の家庭……………五〇

四月十四日。最後の一日……………五二

廻廊の町ボロニヤ……………五六

四月十五日。ミラノからボロニヤ……………五六

四月十六日。中古の形見の寺々……………六二

四月十七日午前。大寺、畫廊……………七五

花の里、畫の都……………七九

四月十七日午後。フネレンツェ到着、十寺の御寺……………八〇

四月十八日。聖マルコ神に恵まれし畫師……………八九

四月十九日。復活祭、カルミ子の寺、メデチ家の庭……………一〇五

四月二十日。フネレンツェの丘、聖十字……………一一六

四月廿一日。聖母像の數々……………一三〇

四月廿二日。僧房の壁畫、高臺の夕日……………一四〇

四月廿三日。フネレンツェ、僧院と聖母……………一五七

聖者の故郷アッシシ……………一六五

四月廿四日。花の里から日の出の里、聖者の棺前……………一六六

四月廿五日。壁畫、棺前、新門の發心、古跡、古城……………一七七

四月廿六日。天使の聖母寺、説法の辻、日曜の勤行……………一九一

四月廿七日。カルツェリの庵棲、グビオの狼……………二〇一

四月廿八日。聖者の生家、聖者の石像、神の鳥、ダミアノの庵室、太陽の頌、聖クララ、女子教育……………二一一

四月廿九日。天使の寺、聖者の最期、刺なしの薔薇……………二三一

四月三十日。初夏の天然、聖者の追懷……………二三九

五月一日。オリツ畑、古畫室、光耀裏の壁畫、入日の光……………二四六

五月二日。聖者の像、摘み花、茶會、田舎の古寺……………二五四

永遠の都、法王の寶座……

五月三日。ロマの宿り、聖ビエトロ……………二五九

五月四日。公園、郷信、湯殿の寺……………二五九

五月五日。フォロの廢墟、ジャンニコロの丘……………二六四

五月六日。ファルチシナの畫、ラテラノの寺、樞密
顧問、音樂者……………二七〇

五月七日。ワテカノ宮廷、ボルゲーゼの園、コルソ
の通り、月夜……………二八五

五月八日。アメリカ學院、オステア街道、城外の聖
ポロ、詩人の墓、テスタッチオの丘……………二九八

五月九日。ハドリリアンの別荘、テツォリ……………三〇〇

五月十日。日曜の寺、音樂會……………三〇〇

五月十一日。傳道會、學校、僧院……………三三三

五月十二日。尼衆團の學校……………三五四

五月十三日。イシドロの寺、大學、フランシスカンの靴……………三五九

五月十四日。シロッコ風、學院の食事、公園……………三六一

五月十五日。再びアンジェリコの畫、バラテノ丘上の
半日……………三六五

五月十六日。聖ビエトロの塔上、システナ堂……………三七六

五月十七日。テルメの中庭、聖ビエトロの大儀式……………三八五

五月十八日。荷造り、告別……………三九四

ロマからエチチアへ……………三九七

五月十九日。ロマを去つて汽車の旅……………三九七

五月二十日。ラエンナの寺々、フェルララ……………四〇二

五月廿一日。アントニオの寺、アレナの聖母寺……………四〇九

イタリアの別れ、エチチテの二日……………四一五

七月九日から十二日。再びロンドンの生活……………五二〇
七月十三日。原稿の焼失、大寺、偉人の墓……………五一九
七月十四日。博物館、公園、博覧會……………五二四

原ぐさ日記(四十一年)

八月四日。再會、岩山に原草、湖上の美人……………五三三
八月五日。オーの湖、湖上の家庭……………五四〇
八月六日。オーの湖のあさばらけ、コー谷の山登り、
オバン海岸の夕暮……………五四八
八月七日。スコットランドを西から東に……………五五六
八月八日。大學、魚市場、デーの谷、山中の貴族村……………五五八
八月九日。山村の日曜……………五六三
八月十日。山道十里、楽しき家……………五六四

八月十一日。谷岨の別荘……………五六九
八月十二日。一日の安靜……………五七一
八月十三日。ダンデー、畫師の家、離別……………五七二
八月十四日。グラスゴウの見物、博覧會……………五七七

挿 畫

諸聖者(アンジェリコ筆)……………
貞潔の徳(ジオット筆)…………… 卷頭
イタリアの旅、花摘日記道筋…………… 卷頭
イタリアの花…………… 三
ゴットハルト峠の悪魔橋。アルデルマッテンの雪…………… 八
ルガノ湖、オリアの村、二つ…………… 二四

同サンマンメメの村。オリアの村……………二四

コモ湖上。ルガノ湖上の長橋……………三二

ロカルノ岩上聖母の寺……………四〇

ボロニアの聖フランシス寺。同斜塔……………六四

フレンツエの堂母并に鐘樓……………八〇

聖フランシスの最期(ジオットー筆)……………八四

殉教者ベテロ(アンジェリコ筆)……………九二

キリストを迎ふる二修道僧(同)……………九二

十字架上のキリストと諸聖者(同)……………九六

聖母と聖子(同)……………一〇四

フキエッレの聖母(同)……………一二〇

サロメの舞。聖ヨハチの昇天(ジオットー筆)……………一二八

忍受のキリスト(アンジェリコ筆)……………一四四

復活の朝ぼらけ。キリストの葬り(同)……………一五二

受胎告示(同)……………一五二

アッシシの眺め二つ……………一七六

聖フランシスの小鳥説法(ジオットー筆)……………一八四

カルツェリの庵室、城門を遁して聖フランシス寺……………二〇〇

カルツェリの山道。ダミアノの庵室……………二〇八

テッシオの谷から聖フランシス寺……………二四四

アッシシ聖フランシス寺のヴォールト……………二五二

同壁畫、マリカとエリザベト(ジオットー筆)……………二五二

聖クララ尼……………二五六

傳道フランシスカン本寺……………三四四

聖ロレンツォの施與(アンジェリオ筆)……………三六八

ラエンナの聖ギタレ寺……………四〇八

エチチアの海……………四三二

ミラノ堂母の屋上……………四五七

ピッテ園よりフレンツェの眺め……………四六四

テベロ河上、天使塔と聖ピエトロ……………四八〇

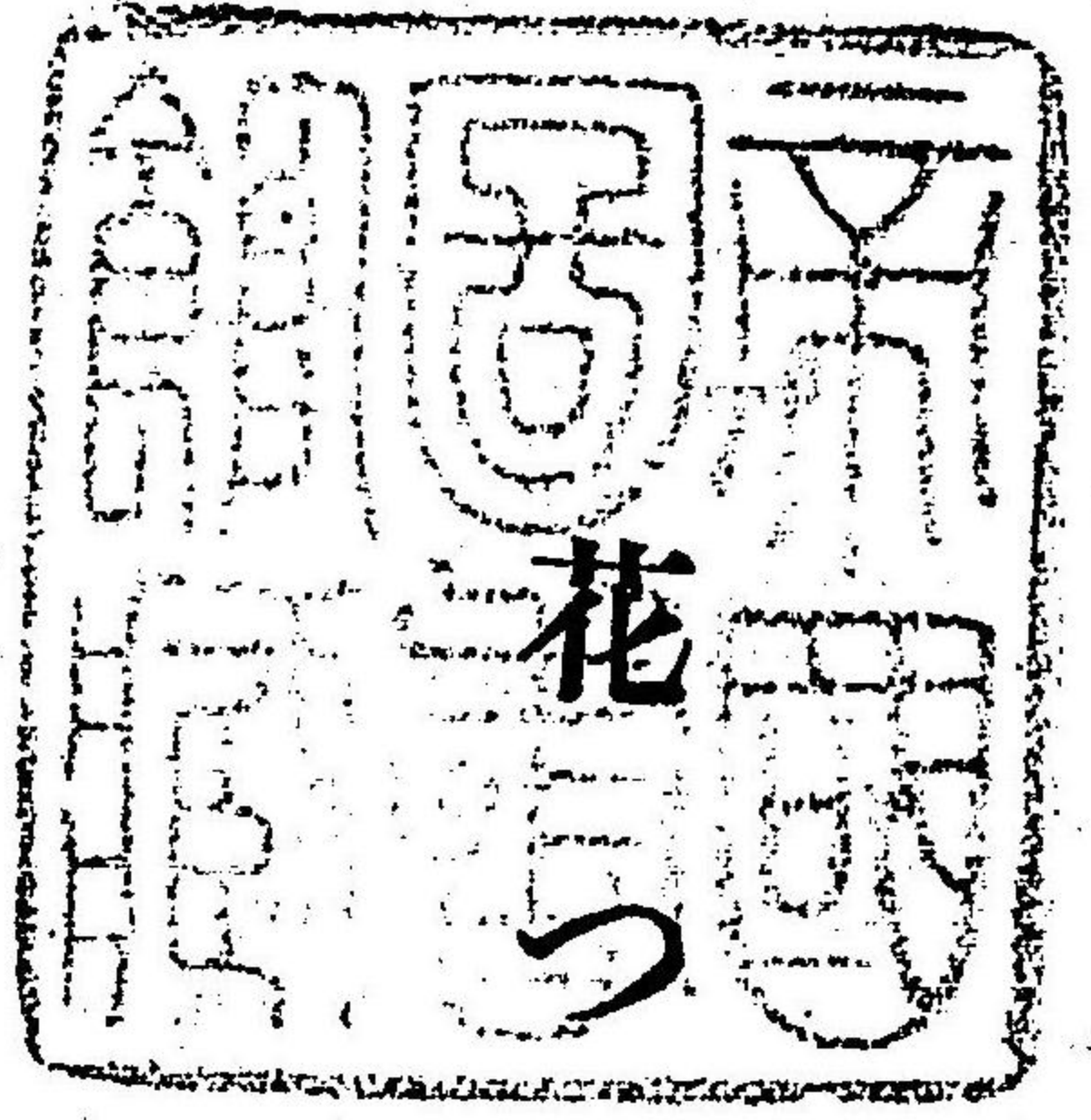
チミの湖水、月の女神の鏡……………五三二

スコットランド旅行、原草日記道筋……………五三二

スコットランドの摘花……………五三六

パラテル途上。エレン島……………五五二

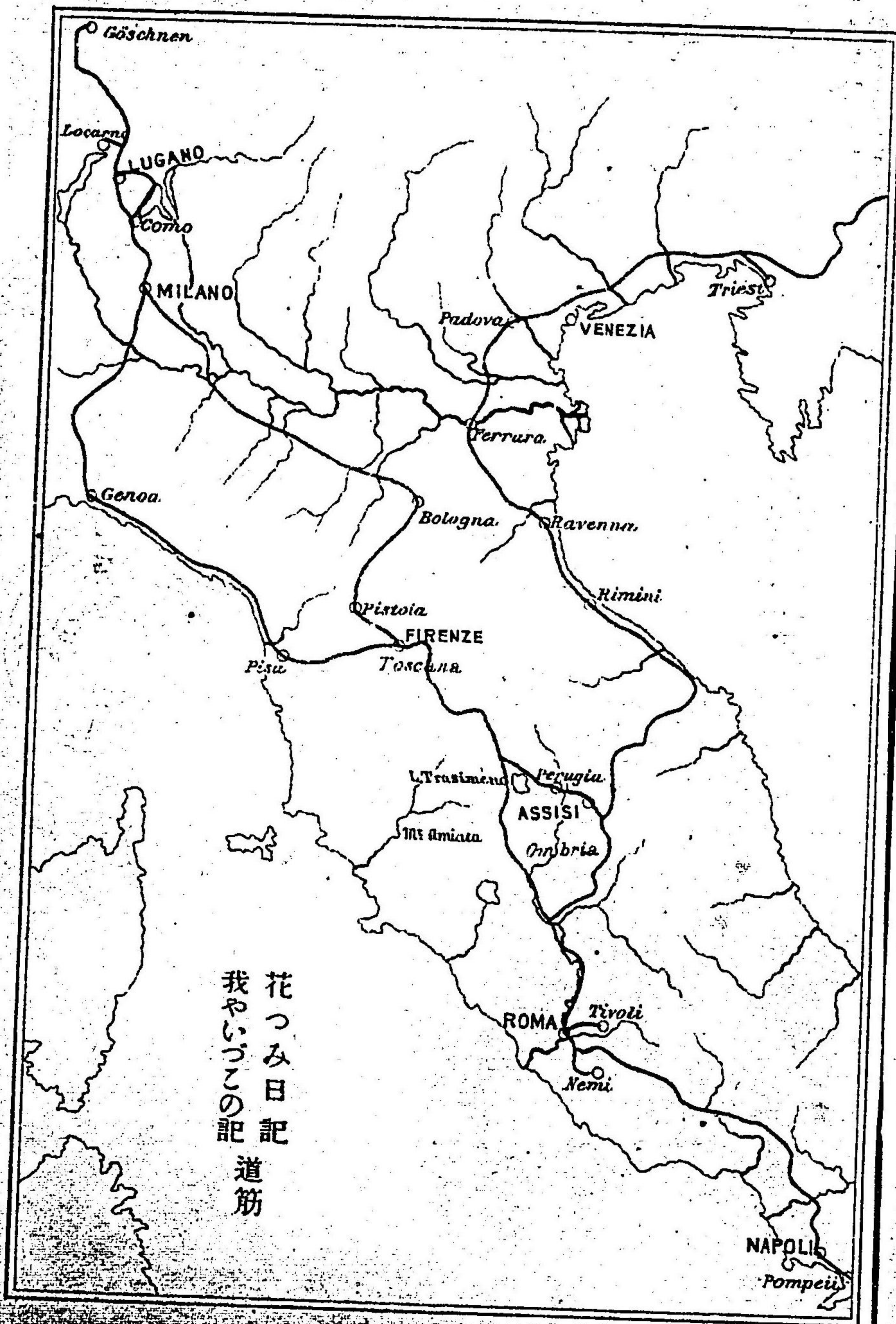
コーの谷、女王の眺め。スコットランドの山地、牧羊……………五五二



イタリアの旅

み 日 記

玉ならで摘みにし花を家づとに
過ぎにし野邊のかたり草にせん。



Tornasti, o Primavera,
 e l'erbe verdi e i fiori
 e i giovanili amori
 tornarono con te.

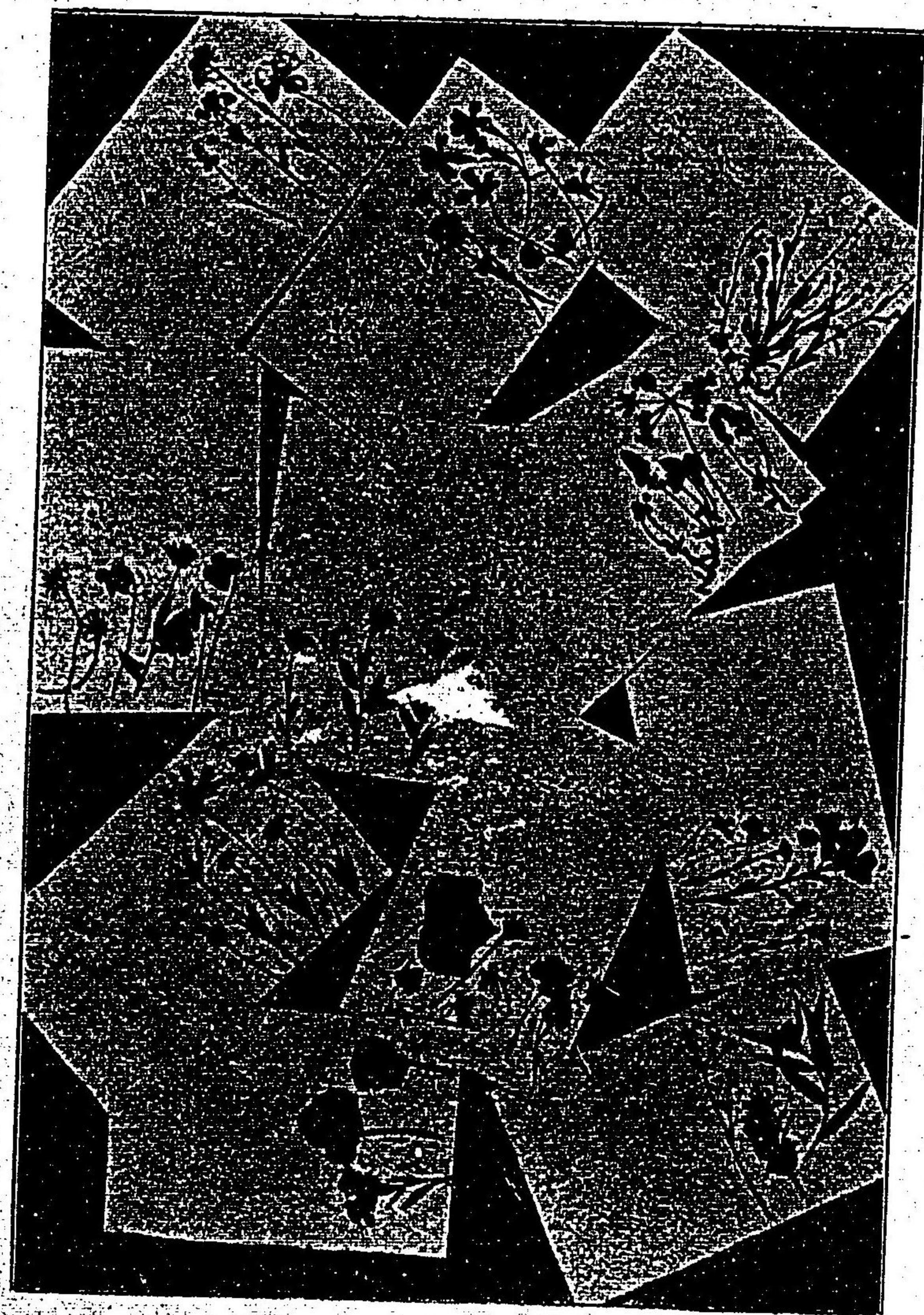
E il mio felice stato,
 teco una volta nato,
 col dolce tuo rinascere
 tornò piú dolce a me.

Su la nativa spina
 aspetta già la rosa
 che l'alba rugiadosa
 tempri il suo bel color.

Son nati i bei giacinti,
 gli anemoni dipinti,
 le mammole, i ranuncoli
 e ogn' altro amabil fior.

E in seminati solchi,
 speranza de' bifolchi,
 delle maese giovine
 le foglie verdeggiâr.

De i geli dell' inverno,
 a compensarne il danno,
 ringiovenisce l'anno,
 torna ogni bel piacer.



イタリアの摘花



ゴットハルトの雪

四十一年四月五日。

雪中の山上り。

ルガノの湖畔で春の夜の月を眺めやうと考へた今日の晩をゲシ
チンの山中雪の真中です。

ツューリヒを立つたのは朝の十時、今日も空は曇つて居たがツューリ
ヒ湖畔の山々は遙に水の上に連つて見える。昨日見たエンゲのワ
グチルの家なども瞬く間に過ぎて、汽車は段々丘の麓に沿ふて高見
に上る。湖水の眺めは廣くなる。どこにも青草の青々した牧場や
果樹の園、その間に緑色の窓の家。ツューリヒの湖畔は實に平和の樂
園である。トンチルを一つぬけて今度は山の間、又トンチルを出る
とツィグの湖水。湖水の先にはリギの山が、上は雲に蔽はれながら、
下の方にも雪が崖に積つて、黒い岩山に白雪の斑を作つてをる。湖

水の岸アルトゴルダウに來た。先年リギに上る時に來た事のある土地、天氣がよければ、右にはリギの峰、その麓を潤すツীগの湖、左には尙別の湖水を隔て、ミーンテンの尖つた岩山が見えるのであるが、今は曇つて、只二つの湖水の水面が悲しさうに見えるのみ。それから南に向つて四州湖の岸に出る。湖水の水は底の知れない様に深碧の色をなして、削つた様な山々の間に死んだ如くに湛えてをる。此の湖水を見れば、テルの芝居を思ひ出す。此の湖水のぐるりに住むだ強い氣丈な人民の獨立心がこの自由國スイスの基本をなしたのである。湖水の南につきる處はフリーレンの村、六年の前に船でこの湖水を渡り、この村から馬車でテルの村であつたといふアルトドルフに泊つた昔しも活き／＼と思ひ出される。それから十一月の精靈祭の夕方に行つて見たアルトドルフの寺の塔も見える。汽車は段々上つて山と山との間を行く。その山々の間の野原には草が

霜枯もせず、青々として、その中に黄色の蒲公英や櫻草が咲き亂れてをる。而かも兩方の山々の少し上には雪が残つてをるばかりでなく、雲と見えるのはふる雪で、木立は皆雪の花をつけてをる。

峰の木々には雪の花、野には黄金の櫻草、

冬と春との行きかひに、迷ふスイスの山の雲。

進むに従つて兩側の山は高く、遠くに重なり重つて突き出てゐる山の頂は雲にかくれ、雲の中から山を傳ふて落ちる瀧の處々にあるのが、何となく天上から落ちる様に見える。深山の積雪の中にも春が來そめ、雪水がとけ始めたのであらう。

春や來ぬ、アルプの白雪とけそめて、

岩間にかゝるしら糸のたき。

山を上るに従つて雲に近く、雲と見たのは皆飛ぶ雪で、大曲りのトンネルを出た八百メートルの處より上は四方銀世界。その雲のは

れ間には又岩角山蔭のあちらこちらに積つた氷や、なだれ落ちた雪が見える。仰いで見て天をつくかと思ふ峰の上にも亦雲霧の間から峰が重なる。

仰ぎ見て、空ゆおりしと見し峰の

上になほ峰、雲の間に見ゆ。

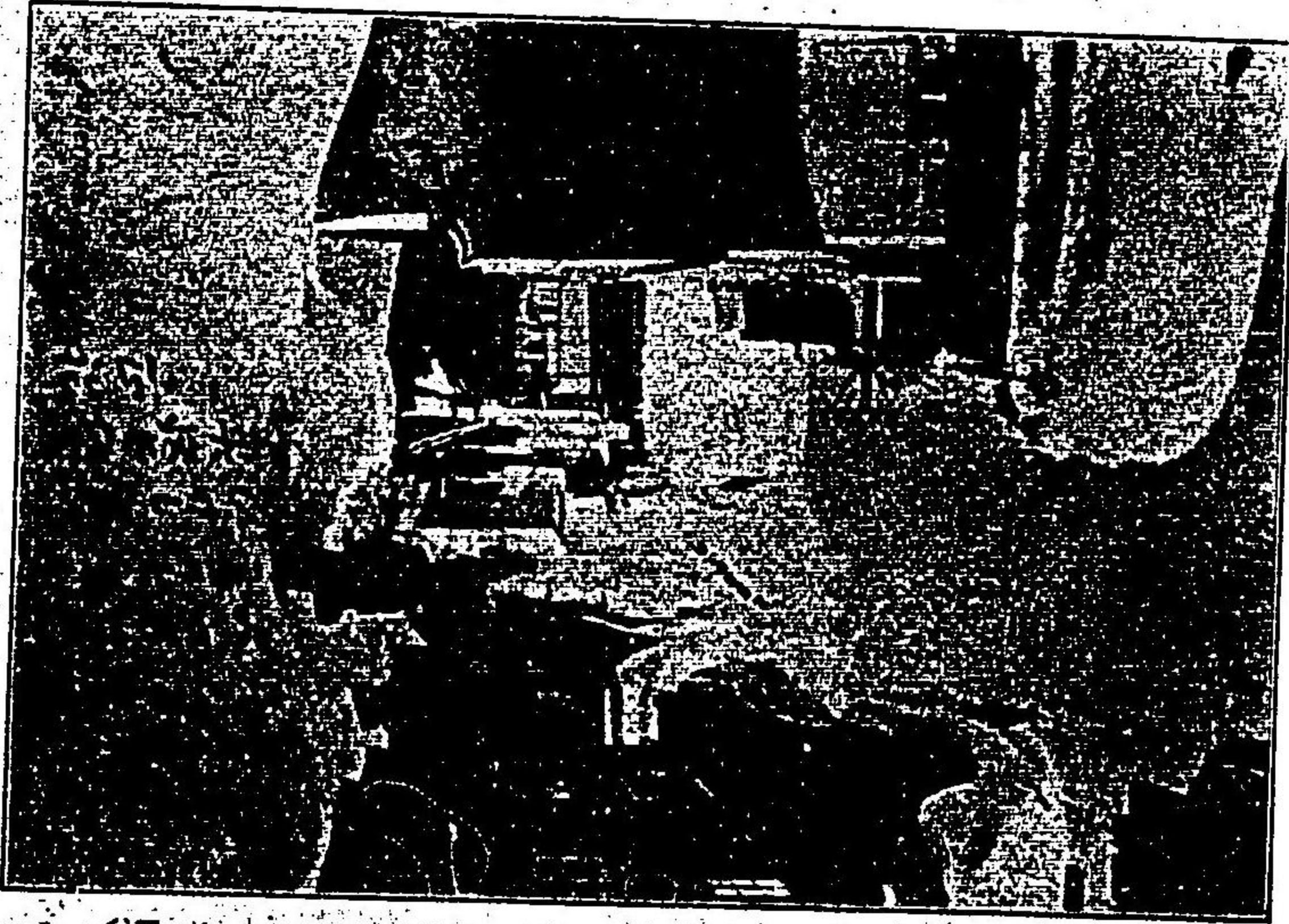
仰では雲間の白雪の峰、俯しては雪なだれの落ちこむだ谷水。少し前に通つた處は忽に下に見、千百メートルのゲンチン (Göschenen) の村に着いた。こゝで皆が食堂に入つて中食をする。今日はルガノまで行くつもりであつたが、食堂からこの村の四方の雪を見、先年この村に留まりかけてよした遺憾を思ひ出し、一晚こゝに泊まるにきめて、食事を終つて、荷物を運ばせ、このゲンチンホテルに着いた。先年汽車の待ち合はせに中食した覚えのある家、覚えはこちらにあるのみと思ひの外、此のホテルの番頭で太つたぢいさんが来て、あな

たは前に一度此處へお出になつた事がありました、やうといふ。よく覚えてをるに驚いたが、それもその筈、日本人のめつたに來た事のない處故、日本人が前に來て、山上りを勧めたにしなかつた、とても覚えて居たのであらう。今日は山を上るかと思ふから、勿論だ、一つそりを命じてくれといつて、部屋を定めて一と先づ荷物を解く。スイス人の特徴のやさしい眼、同じくドイツ語の人民でも、まるで目つきがドイツ人と違ふの、ポイが來て、直にストーヴに火を焚いてくれる。室の内には火のバチ／＼燃える音、外には雪の中に何の音もない。暫くして櫓の馬の首につけた鈴の音がきこえる。下に降りると櫓が待つてをる。三時に宿を出て櫓で山を上る。少しの事で雪は一層深く兩方の山は高く削つた様に聳つ。大分雲も上にあがつて、頂上は見えぬが、山の崖が雲間に見え隠れして、山は晴天で見たよりも高く、大く又峻しく見える。雪が集つておちかゝつた處には岩が全

く削られて雪の谷になり、その間々には雪に壊はされない岩山が立つ。その岩の面に氷柱が剣の如く下がる。

雨や雪凌ぎて千年、危くも
つゝらかゝれる岩のそばたつ。

上るに従つてこの景色は愈嶮岨になり、雪は深くなるばかり、追ひ風ではあるが雪嵐の寒いの吹かれて、外套を頭に纏ふて行く。馭者は平氣に外套もなく、一枚の上衣だけでをる。寒くはないかといふと、雪の中で育つたから雪は寒くないといふ。夏の山路の面白い事、それからなだれの落ちかゝつた處に來てはなだれの話しをする。自分も一度なだれに埋まつたが、死にはしなかつたといつて平氣なもの。「然し今日は大丈夫、なだれはありません、これで朝日でも照ると随分このあたりはあぶない處です」といふ。如何にも路の直上は千丈の谷、それから二三日前に落ちて來たといふなだれが山の上か



(九頁参照)

トルハトツゴの雪



(八頁参照)

トルハトツゴの雪

ら谷の底まで一直線に進んで、谷の向ひ側からも同じくなだれが落ち、谷川の上は兩方のなだれで埋まり、路の處だけその雪をかきのけて通れる様になつてをる。谷向ふの山を見て、馭者は十年ばかり前にはわたしは毎日あの山の岨に羊を追ふて上つたのです。五月から十月まで羊を世話して、山をつれてあるくと一疋に三フランづゝ貰へますといふ。子供の時から夏は羊を追ふて山の岨に朝から晩まで、冬は雪の中にくらす。身體が丈夫になるのも無理でなく、又この人民が自由の精神に富むでをるのも自然であると思はれる。

悪の魔橋 (Teufelsbrücke) といふ處に来る。深い谷の上に石の橋がわたしてある。馭者が語る、この地の昔話して悪魔がこの橋を作つたのだといふ。ウリ州の人民がこの谷に橋を架けやうとして見たが、どうしてもかゝらぬ。そこへ悪魔が来て、金を澤山出せば架けてやらうといふ。金をやる約束で橋は出来たが、金をやらなかつた。

そこで悪魔は怒つて、誰でもこの橋を初めて渡るやつを取つてつかんで川に投げ込むといつた。智慧のある老人が一疋羊をつれて、それを追ふて橋を渡らせた。悪魔はその羊をつかんで河に投げたので、老人は安全に橋を渡り、それから渡る人も皆安全だといふ。馭者はこの話しをして、何どうせ話しですよ、事實じやないのぢやうと付け加へる。田舎者の正直なのに可笑しく思つた。この橋の側の岩には黒悪魔が火焔を吐いてをる畫が畫いてある。又その岩に穴を掘つて、その中にはバドアの聖アントニオの像が祭つてある。橋の上から見れば、谷川は一面の瀧であるが、今は雪の蔽ふた下や、雪のとけた間に早瀬をなしてをるのみ。雪なだれをよけるためのトンネルを二つ過ぎる。その角に城堡があつて、岩山に據つて砲臺を造つたらしい。その入口には雪の中に番兵が立つてをる。唐代の朔北の詩にありさうな景である。

此の砲臺の前を過ぎると、山の間を開けた一面の廣原で、日光の戰場原と同じ様に元は山間の湖底であつたらしい。その廣野原は一面の白雪。先の方、山の麓に一群の人家が見える外は、處々に木立の頭が雪の間に、出野原の四方は盡く山。その山も麓のみ見えて、跡は雲に蔽はれてをる。天氣がよければ、この野の四方、山々の雪が中々よいと馭者はいふ。程なくその村に着く。家の雪に埋もれてをるのを見れば、いかにも雪の深さが分かる。夏だけ開くといふホテルの鐵柵は僅にそのさきだけを出してをる。夏は兵營に兵隊が来る、その砲車の倉は軒まで雪。村に這入ると日曜で遊んで居る兵卒や村の娘が、スキといふ長い木の靴で雪の上をすべつて遊んでをる。小供等は高見に集まつて雪投げをしてをる。クローチといふ宿に下りて家の中に入る。此處にも村の者や兵卒が集まつてをる。茶を飲むで諸方にはがきを出す、四月の空に雪の中から雪のはがきを

出す。

三十分ばかり休んで外に出る。今先きには少しはれかゝつたと
思つた空が、全く雪空になつて、北風が強く吹雪になつてをる。その
吹雪を切つて北に向ふ。顔も何も向けられたものでない。時々手
袋を顔にあつて指の間から先を見ると、自分等の先に二つ櫓が行く。
一つはフランシスカンの修道僧をのせ、一つは郵便をのせて行く。
そのフランシスカンの僧はカプシンといつて先の尖つたあたま被
りを被てをる。尖つた茶色のカプシンが白雪の中にいちゝるしく
見える外、四方は全く雪の世界。馬は下り坂を勢よく雪を蹴つて進
む。風は横に吹雪を吹きつける。路の曲り手や、岩角には風が一層
強く、地に積もつた雪を吹き上げる。まるで雪の嵐にまかれた様な
心地がする。

雪の波けりて破りて行く櫓の

行く手の空に吹雪さかまく。

城堡もトンネルもいつの間にか過ぎ、悪魔橋の上をかけぬけて路
の曲りに来た。下り坂を馬が餘り勢込むので櫓はすてんと横に
倒れる。取者もろとも雪の中にころげ込んで、馬だけは勢に乗じて
空の櫓を引いて先に行く。雪の中だけに少しも怪我はなく、取者は
驅けて馬をつかまへ、こちらは膝かけを持つて櫓に追ひつき、又坂を
下りる。取者は先の櫓に追ひ付かうとして一鞭あてると、馬は一層
の勢で走る。然しころびもせず、先の櫓に追附いて、大分山を下つた
ので、吹雪もゆるやかに、雲を少し上に見上げる様になつた。間もな
く、ゲシホンの鐵道が見え、村が見え、五時すぎに宿に歸つた。宿の前
で櫓を下りて自分のからだを見ると、外套は固より、顔はひげも眉毛
も雪の花をつけて、白熊の様になつてをる。それを拂つて部屋に歸
るとストーヴの火であたゝかくなつて、先づ活き返つた様に思はれ

た。行きの上り路は一時間半もかゝつたのが、歸りは半時間ばかりで歸つた。

積雪の中の静けさ、子供が遊んでをる聲と、時々通る櫓の鈴の外、近い鐵道の音もきこえぬ。窓から外を見ると、吹きおろす山風に時々雪がちら／＼飛ぶ。日本では櫻の頃に雪見をする。

峰吹きおろす山風に、ちる白雪を見るにつけ

思ひぞ忍ぶ故郷に、いまぞ盛りの櫻ばな。

その雪の中でロスマニの哲學を讀んで日もくれた。

山里の雪も静けくふる中に

鳥の音もせず日はくれにけり。

食事後この手紙をかく。時々寺の鐘がきこえる外、宿のものも寝てしまつて、天地は全く寂靜。このペンの走る音の外は、祈念をこらすべき自分の心の中の聲のみである。

四月六日。 山陰の別れ。

今朝はゆつくり寝て、おきて見ると窓の外は雪の空。昨日に勝つて降つてはをるが、静かに飛ぶ様にふる。窓をあけて見ても少しも寒くない。朝の茶の後にポイが尙火を焚いてくれた。外は雪中は暖い部屋の静かな中にロスマニを讀む。正午前に少し散歩に出て来たが、昨日は少しとけかけて穢かつた路も皆綿の様な雪に蔽はれて、あるくと一歩毎にグイ／＼と音がする。静かに降る雪につれて吹く風は和らかに顔にあたり、空氣に一種の爽かな氣が満ち、まるで真綿につままれた様な心地がする。一といき／＼天地の大氣を吸ふ様である。村をはづれて少しづつ、山の間を上る。脚下は只白雪の白いのがぎら／＼して眼が眩い。上を仰げば雪の散つて来る先の雲が山々にかゝつて、どこまで仰いで見ても雲の間には雪のかゝつた岩と木立が見えるばかり。行く先は兩方から山が下りて白雪

の間に木の小屋が少し見える。その方にたどつて行つてふり返ると、ゲシチンの村は下の方に見え、先きは同じ様な山つゞき、天が晴れてをればこの邊からも谷の奥のダンマ氷河が見えるのであるが、いくら立つてゐても仕様がなない。

雪のまばゆさに眼を蔽ふて、時々路ばたの雪をつかんで口に入れて宿に歸つた。今丁度一時が鳴る。少し日は照り出したから尙一日此地に居りたいが、イタリアの日數を少くするのも惜しく、今日の二時に汽車で南に向ふ。こゝの四里のトンネルを一つ出れば、イタリアの空で雪もなからう。冬の真中から一時に春にあふのである。

湖上の春

四月六日。

山陽の花、イタリアの空。

今朝の手紙を出して後、二時にゲシチンを出て、四里のトンネルを通りぬけた。そこへ来れば春になる様に考へて居たが、ここにもまだ雪があり、雪が降つてをる。然しゲシチン程には深くない。汽車は山と山との間を下り、北側の様に山は迫らず、谷が幾分か開けてはゐるが、その山々が兩方に突つ立つて、雪の雲が峰から峰にさ迷ふ様は、壯大で幽玄、雪舟の筆をかりて寫したい。その中に汽車は段々山路を下つて谷も開ける、果樹の花も少しづつ見える。七百メートルのファイダに来て、日光が見え初めた。行く手の山には白雪の上日が照つて、雲のかゝつてをる峰もあるが、又雪の山が青空に聳えても見える。愈よイタリアに來た。汽車の留る度に車の外で人の話し

てをるのは皆イタリア語。車の中でも車掌が停車や乗りかへを知らせるに先づイタリア語で云つて、それからドイツ語でいふ。山の上には庵室や寺が見え、家の屋根は石でふいてある。日の光りが段段強くなる。雪の峰は高く上の方に隔たる。ベリンツナに來た頃は全く春になつて、窓から横にうける夕日も暑い位である。その邊の野は青草で、その草原に桃の花が盛り。峰には白雪のその直下の麓に桃の花。

とけて流るゝ峰のゆき 土のふところ潜み來て

日なたに生ふる桃の木に 薄くれなゐの花さかす。

ロカルノの湖水に夕日のあたるのを見て、汽車はベリンツナからルガノの方に上り道になる。今まで過ぎて來た北の方の山々には雲が迷ふて、雲の下の谷はうす黒い。こちらは碧空に入日の紅がさして草原の緑と桃の紅とに映する。まるで別世界。きのふは吹雪

の中を馬を飛ばし、今朝まで雪の世界に居て、爽快の一日一夜をくらししたが、今この春景色の處から、元來た山を見ると、あの中に尙一度這入つて見ようかとは思へぬ。雪の面白さも決して春の日には劣らぬが、今山を出てこゝに來ては、復山に歸る氣はせぬ。千丈の山、雪の嵐には力がある氣を強くする。然し春の空は優しい心をとらかす。丁度ユダヤの豫言者の信仰の峻嚴なのにキリストの溫和。ゾロアスターの熱誠に佛陀の寂靜。日蓮の威烈に法然の濃厚。二つは互に相容れぬ様ではあるが、反對でなしに互に相補ふべきものである。今日一日の雪から花にの變化を見て尙深くこの事を思ふ。

ルガノ (Lugano) に着いたのは五時半。ステーションを出ると直ぐ下に湖水、そのぐるりの山々の圍んだ間に深碧の水を湛えて、その湖岸に赤瓦の屋根があちこちにかたまつてゐる。今のこの宿に着いたが、眺めは高見であつても前に鐵道があるから、あすは外に變はら

うかと思つてゐる。

宿を出て、ビニャミ氏 (Signor Bignami) を尋ねた。大體の方角をつけて行つたが、どこか分からぬ。路で二三度人に問ふて、解かりかぬ。イタリア語でやつと尋ね出して、その家を番づれた。五十に近い半白の紳士が出て来て、よく来た、待つて居ましたといつて、夫人も出て来る、子供も出て来る。暫く話しをし、手紙を受取つて、あすの再會を約束して歸つた。来て居た手紙の中に内からのものもあつた。

宿に歸つて座敷で手紙をかく。日は西に沈みかけて、湖水のあちらの山々が夕日に照らされて、黒ずんだ赤い紅をなしてをる。北の方には嵐の様な雲が出て、高い雪の峯はかくれた。

夕食の間にはイタリア人が音楽を奏して歌を歌ふ。食堂には大分人も多い、その中に看護婦と食事をしてをる夫人が二人居る。何れ夫が肺病か何かで来てをるのであらう。その中の一人はこちら

を見てはこわい顔で睨む様に見る、始めは失敬な奴だと思ふたが、夫の病氣のために顔つきも自然に峻になつたのであらうと思へば、氣の毒である。

夕食の後に外に出て見ると、空氣は冷かであるが、少しも風はなく、新月が西の空にかゝつて、星の光りはきら／＼とし、山のみは黒い影になり、湖水の上にボートか何かの燈がちら／＼する、今夜からこの静かな、イタリアの湖畔で寝る。

四月七日。 遠方の友。

今日は宿を變はつた。昨日泊つた宿はドイツ宿で、食堂に入つてもドイツ人がギロ／＼こちらを見るので不愉快であつたが、今日来た宿は客はイギリス人ばかり、宿のものはスイス人で居心地がよい。山の高見にあつて、前には庭の木立ちを隔て、湖水、その上に湖岸の

高い山が見える。部屋には広い縁側があつて、そこに出ると木立を隔て、湖水の眺めが我が庭の如くである。

中飯はピニヤミの家に招かれて、愉快な家族の中に食事をした。ピニヤミ夫婦の外に十位じゅういを頭に三人の女の子と一人の小さな男の子と、外に細君の妹とが一家族である。食事はイタリア風の米料理。食事中に日本の事を話すと、子供等も面白さうに聞いてゐる。子供等も皆フランス語が分かる。時々小さな男の子にイタリア語で少し話すと喜んで、Contento(嬉しい)といつてをる。國は隔たり、言葉は違つても人情は同じで、手紙の往復で、年來の交際の感がある。「君の來るといふしらせがあつてから、子供等も君の寫眞を出して、日本のおちさんが來るといつて、毎日待つて居た、友人等も集つて來るであらう」など、實にうちとけて食事をした。あすは卯月八日だから宿に來てくれるといふと、他の友人で君に會いたいものも居る、それが遠方に

居るのもあるから、日曜の方がよいといふ事であすは招待をよして、散歩をする事にした。

ピニヤミの家から歸つて後、日の暮れには雨中ながら山を下りて市中に出、湖岸の景色を眺めた。山々には雲が迷ひ、湖水の水は雨中にしめやかに黒い色をして、日もくれかゝる。廊下の様に屋根下をあるける様になつた町をあるいて宿に歸つた。

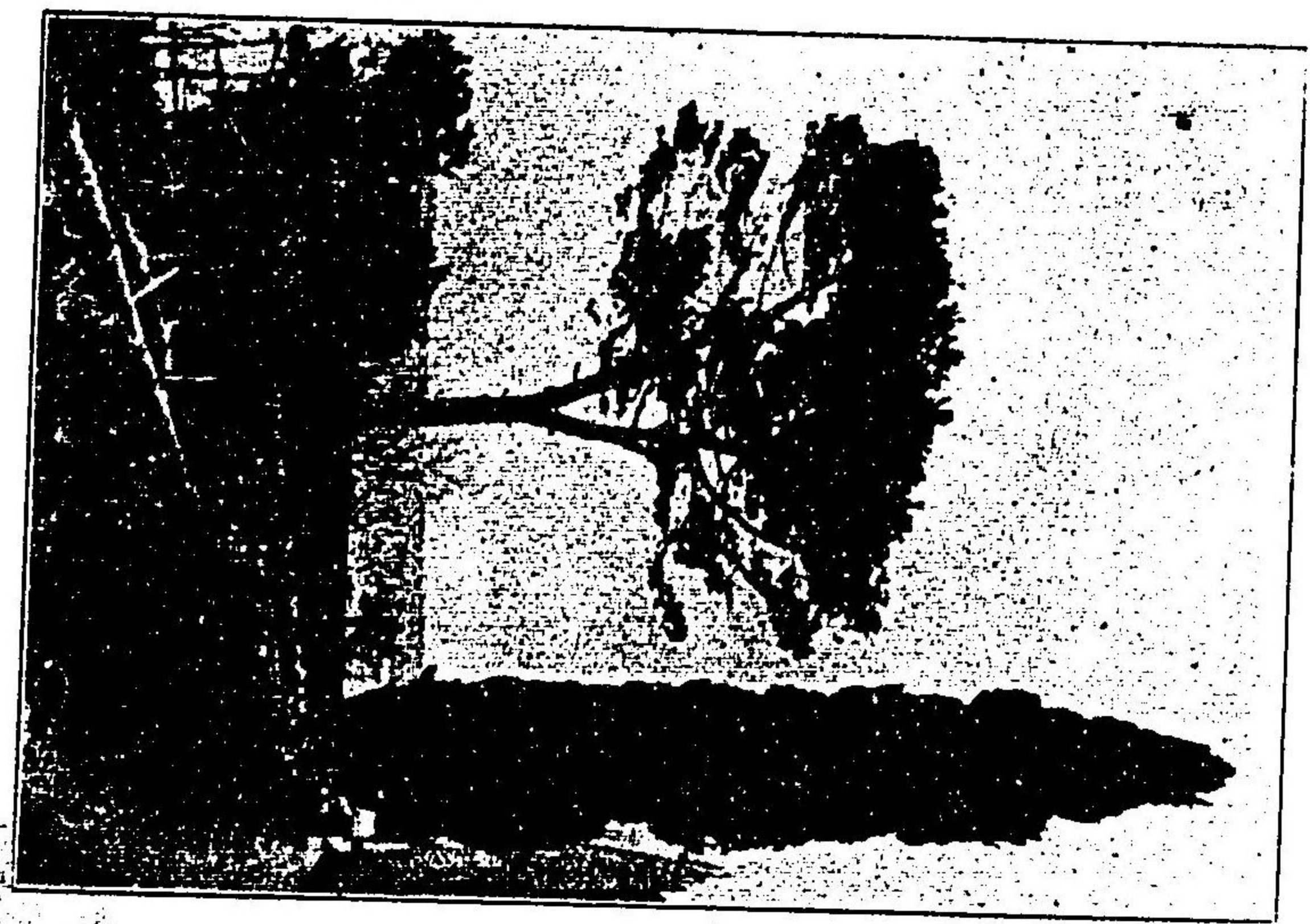
四月八日。湖邊の花摘み。

今日は卯月八日の佛誕會、朝おきて見ると少し日光がさし、鳥が鳴いてゐる。朝飯の後には椅子を縁側に出して、そこでゆつくり聖フランシスの傳を読む。十時すぎに宿を出て、高見で湖水を見はらす路を散歩し、それから湖水の岸におりた。昨日に引きかへて日光があるので、湖岸には散歩の人の中々多い。づうと湖岸をあるいて後、

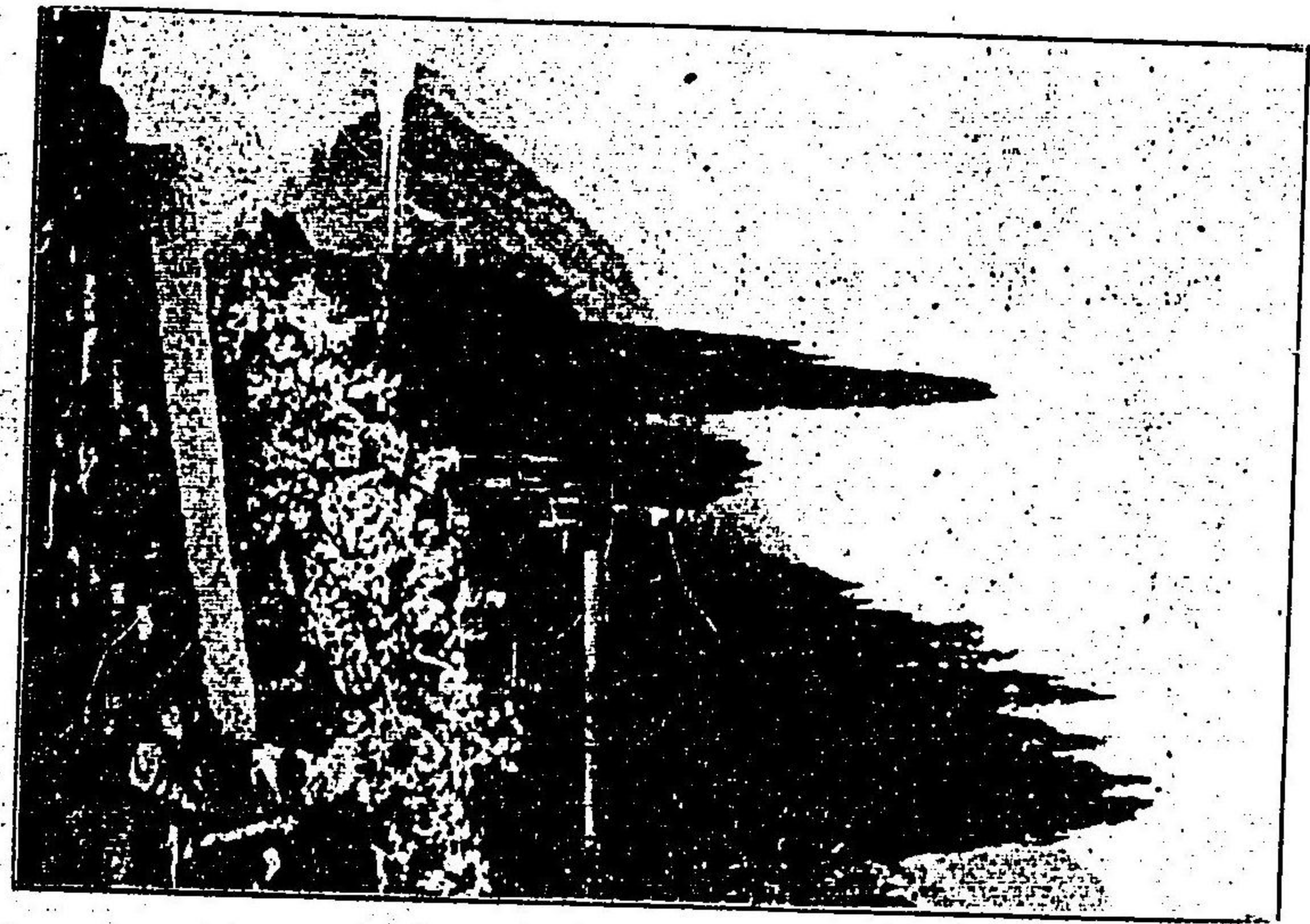
天使の聖母 (Santa Maria degli Angioli) といふ寺に行つた。外側は簡單な建物中にも大した飾りもないが、その正面にキリストの死ぬ時の光景を畫いた壁畫がある。一つ一つの人物は中々よいが、全體としては餘りにごた／＼してゐる。この壁畫と同じ畫師、ルイニ (Luini) の畫いた聖母は小な御堂の中にある。此の畫の寫しは内にも額にかけてある。内にある寫しは色が少しけば／＼しすぎて居るが、本物は壁畫の常として色もおちついて、聖母が二人の子供(洗禮のヨハネとキリストと)を愛撫してゐる様といひ、子供のあどけなさといひ、ラファエル以後の名工の作として恥しくなく、此もフランシスカン派の信仰の現はれとして、特にゆかしく見た。佛誕會の日にフランシスカンの寺でキリストや聖母の畫を讚嘆するのは偶然でない。歸りには又丘の路を上つて、花をつみつゝ宿に歸つて中食した。

午後はピニヤミとの約束で、飯後直にその家に行つた。子供等も

(二五頁参照)



三 十

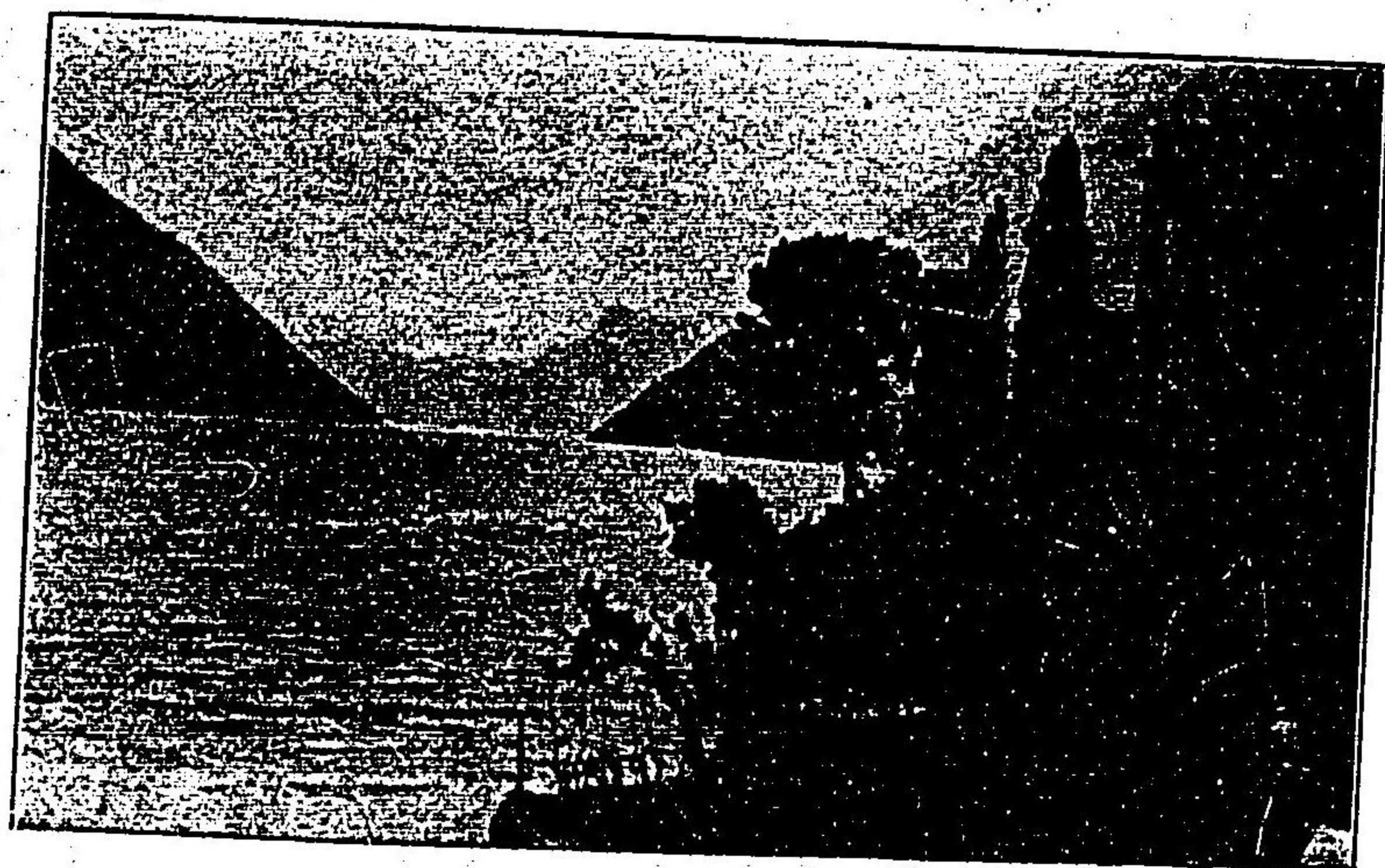


ミヤノ湖の岸

上 湖 ノ ガ ル



サンマンメッタの村



オリアの村

(二五頁、二六頁参照)

庭に出て待つて居て、それから内で暫く話しをして、その間に妹がタ
ンホイゼルのエリザベットの祈禱をピアノで引いてくれ、カフエを飲
後、ピニヤミ夫婦と女の子二人と一緒に山をおりて、汽船で湖水に出
た。ルガノの町はづれ、丘の上にカステニオラの寺のある邊には、湖
岸に別荘風の家があり、桃の花が澤山咲いてをる。舟が湖水の真中
に出るに従つて四方の山は高く見え、眺めは湖水の南北に亘つて廣
くなる。三十分ばかりでオリオ(Orio)といふ村で舟を出る。此處は
もうイタリアで(ルガノはスイス)舟の上り場にイタリアの税關吏が
劍をつけて番をしてをる。上つて直にフォガツァロ (Fognzaro) の別
荘がある。その人の書いた小説にこゝの景色や、此の邊の村を題に
したのがある。別荘は小な家ではあるが、壁に色の塗つたイタリア
風で、庭にはシプレヌの木が淋しさうに空に向つて立つ。此邊の村
は皆山のがけに重なり、つて家を建てたのであるから、路は家と

家との間や、壁と壁との間の狭い處や、又は家の下のトンネルの様な處に敷石があつて、奇態の町である。それでも皆町の名があつて、此の村の本町 (Via Principale) といふのは、幅が三四尺の坂路で、それも人の家の中をくゞつて通る路である。オリオの村はづれ、湖岸の高臺の上に寺がある。寺の壁にはやはり外側に色々の畫がある、これもイタリアの特色の一つである。それから岸を傳ふた崖の道を通る。崖の草原に色々の花が咲いてをる。今日は卯月八日の花摘みである事を話したのを子供等がきいてゐて、色々の花を摘んでくれた。すみれもあれば櫻草もあり、蒲公英だの野菊の一種もある。その乾かしたのを卯月八日の今日の遠足の紀念に子供等にも残しておく。それから始終崖の道や同じ様に畫で見た様な湖岸の村、サン・マンメッテ (San Mamette) の入口に支那の山水畫にある様な橋がソルダ (Val Solda) といふ小河の上に架つてをる。その上からこのソルダ

の水上、奥深い岩山の眺めはどうしても雪舟の山水畫で、岩が秀で雲が湧く。フォガツツァロの小説の聖者はその幼時をこのソルダの谷で送つたのである。マンメッテの村で茶を飲むではがきを諸方に出す。村の者の風はまるで中世の畫で、青い色の衣物の婦人が赤色の着物の子供を抱いてをる。子供等のはいてをる木の履はまるで日本の下駄である、そこらには殆ど何も近世のものはない。はがきを買いに這入つた家の主人は何か畫を書いてをる。その邊りに村の者が集つて見てをる。家の外側には色々の畫がかけてある。家のぐるりのシプレスの木、壁と壁との間の石路、寺の臺や茶店の縁側からの湖水の眺め、總て畫と詩との中の景色で、イタリアの畫師や詩人が畫いたり詠じたりした人生と天然とはこの中にあると思はれた。汽船が來てマンメッテを出てルガノに向ふ。ソルダの谷の岩山、湖岸の赤壁の別荘、シプレスの木立ち、村人の山に出て働く風俗、いくら眺

めてもあかぬ。舟の中ではビニヤミと佛教の信仰やイタリアの政治の話をして、舟はルガノに着いた。妹と子供とが迎ひに来て居て、皆で一緒に山を上つて家に歸つた。ビニヤミ一家と別れて、宿に歸りがけに同宿のイギリス人と一緒に花を摘んで歸つた。夕食の後には同宿のイギリス人等と話しをして、部屋に歸つて此の手紙をかく。今日の卯月八日の茶の代りに湖岸の散歩に出、花をつみ、イタリアの家族の中に入つて子供等と一緒に半日をくらし、實に愉快な卯月八日であつた。

四月九日。コモの湖上。

今日は朝から日光があり、春らしい天気。朝から縁側に出て本を見、十時になつて宿を出、船で湖水に出た。始めはきのふと同じ道。然し、崖によつて重なり建てた村、湖岸にシプレスの木立の間に見え

る赤壁の別荘、崖に咲く桃花の紅に菜種の黄色、岩山の姿、谷の奥の白雪、見るに従つて新しい面白さがある。舟はあちらの岸こちらの村を経て、湖水の東のはてのポルレッツァ (Porlezza) に着く。それから小さな汽車で山と山との間、小さな湖水や、桃畑の間を通つても、一つ東にあるコモ (Como) の湖畔に出る。湖畔の高見を下る間に、コモの湖水の全景が見え、向ひの岸に聳えるムッジオの雪の峰、湖水の岐れて二つになつてをる間につき出たベラッジョ (Bellagio) の小山の半島、右にはチマの岩山、一時に眺めが開ける。山を下りる鐵道の側にはやはりシプレスの木立に桃の花。程なく汽車はメナッジョ (Menaggio) の村、湖水の岸に下りた。船を待つ間にはがきや、此邊の村人のはく木の履を買つた。澤山の買物でもないが、店の娘が椿の花を出して、買物のお禮にといつてくれた。この邊には今は椿が中々多くなつて居るが、元は日本から來たので、何れこの花も日本の椿の子孫である。

椿の花をボタンにさして舟に乗る。舟はベラッジョに向つて出る。この湖水のぐるりの山々は中々高くて、峰には皆雪をいたゞいて居るが、ルガノの山々の様に峻しくなく、雪の峰からゆたかに麓が湖水に垂れて、湖岸の村々が赤瓦や白壁で相連つて見える。東の方のムツジョ、北の方のアルプの高峰は、碧色の空に眞白の輪廓を畫いて日光に輝いて居る。そよ吹く風が南から吹いて、湖水には漣が立つ。のどかな優しい景色。

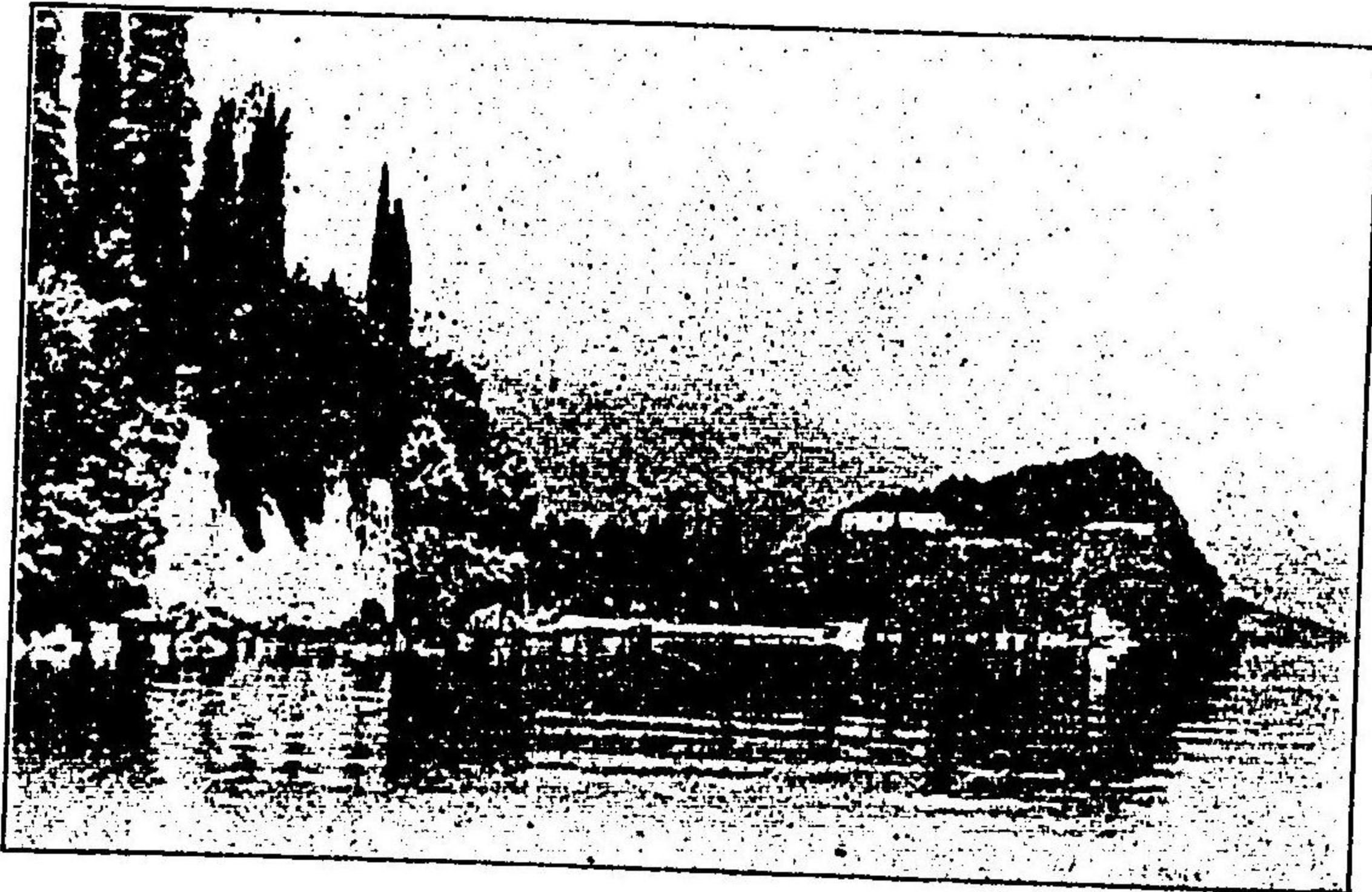
舟はベラッジョに着く。岸の上、宿屋の庭には木立の下、湖水の岸に卓が並んで、そこで新聞を見たり、中飯後のカフェを飲むでをる旅客が多く、岸を往きかひする村の女は頭に赤い巾を着て、木の履をはいてをる。それに加へて家々の白壁には緑色の木の戸、それ等の色合ひが實に面白い。村の後の小山の上には名高い別荘がシプレスの木立の間に見える。その高見から湖水の眺めはこの湖上第一とは聞

いてをるが、時間の都合で上陸が出来ない。村の男がイースターの飾にするオリヅの枝を澤山舟に運び込んで後、舟は又對岸に行く。對岸の村のトレメツォにも、湖岸に宿屋や別荘が建て連つて、その後の山にはオリヅ畑に色々の花、その上はチマの岩山。トレメツォから舟は南に向ふ。山の麓が延びた、アヴドの岬にも別荘がある。湖水の岸にロマ風のアーチの石垣を築いて、見はらし臺の石の欄干には石像が立ち、庭にはやはりシプレスの木立、その先の尖つた淋しさうな木の姿が著しく岬の端につき出て、湖水に映じてをる。この様な別荘の前に舟を停めて、月夜に笛を吹くものでもあれば全く小説中の人物である。それから聖ジョヴニの島、コロモの村など何れに行つても詩と畫との景色。北の方の雪の山々が前の山にかくれかける眺めを惜んで見てをると、先にベラッジョから乗つたイギリス人が後から来て、「富士の山とどちらがよろしい」といふ。「富士は富士、ア

— 湖 上 の 春 —

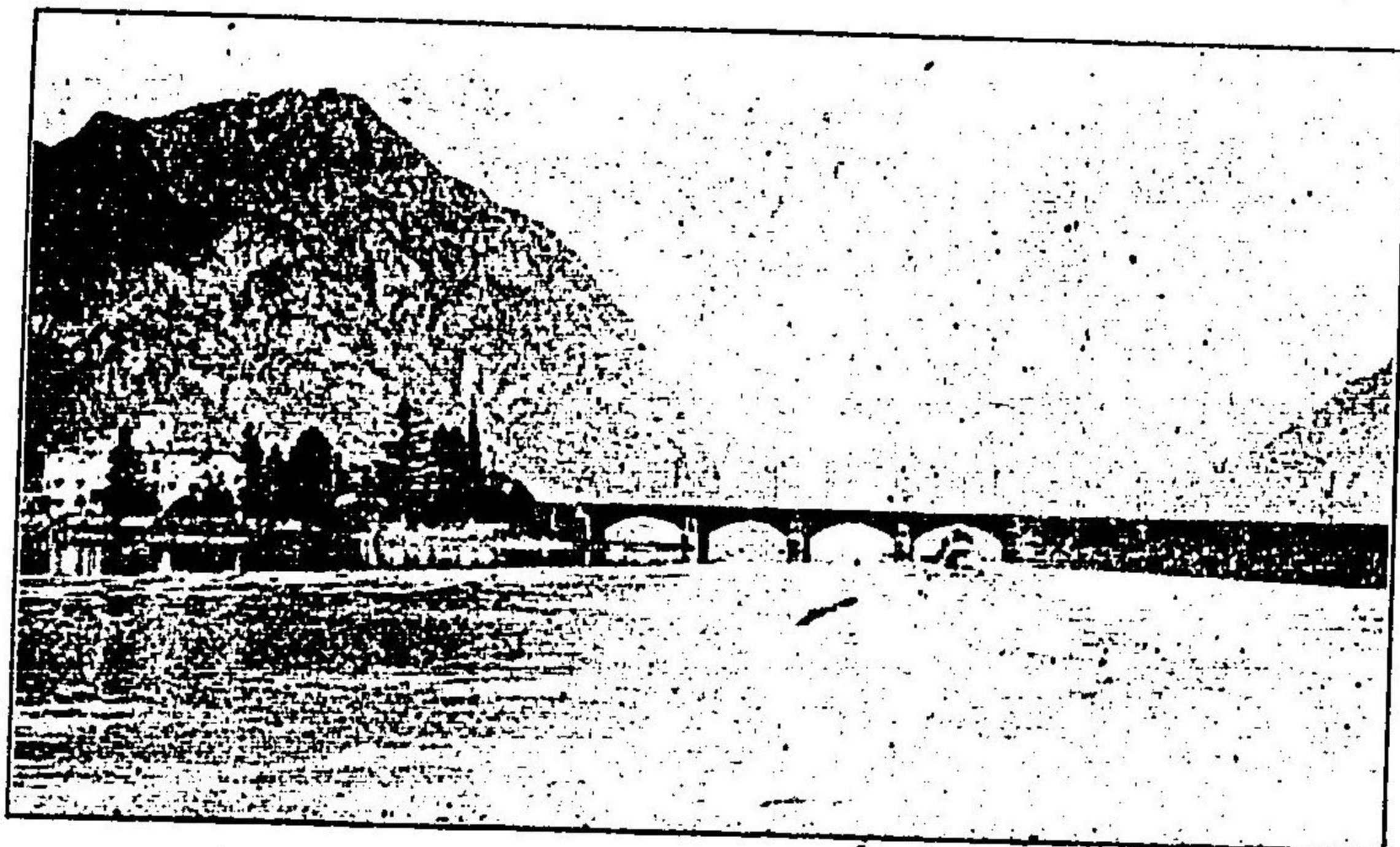
ルプはアルプ各違つた趣があるから、眺めても飽かぬ」と答へると、笑つて、それから暫く話しをする。その中に舟は山の崖に立つた古い壁の連つた村に近く。イギリス人は、此がチツソ(Zugst)の村で、ロマ時代からある。シーザーも此處に來た事がある。自分等はベラッジョに滞在して、湖水のぐるりを時々遠足する。今日はこのチツソを見に行く。といつて同行四人で舟を出て行つた。岸の上の山道を上つて行く四人にハンカチーフをふつて別れを告げ、舟は岬を廻つて南に進む。湖水は左に曲り右に曲る。その岬毎にやはりどこにも同じ様な別荘がある。風に吹かれて甲板で少し眠つた間に、舟は三時半コモの町に着いた。上陸して直にこの町の大寺堂母(ドオモ)大寺をフランスではカテドラル、イタリアではドオモといふ)に行つて見る。變なゴシックと少しルネサンスの交つた建物で、白大理石の正面や、角の柱には一々細かな彫刻がある。中に這入ると、中は全くのルネ

コモ湖上



(三一頁参照)

ルガノ湖上の長橋 左はジェエロソの山



(五一頁参照)

サンスで、寺といふよりも宮殿の様な作り、柱の間にはゴブラン、小御堂にはルイニなどの畫があり、ゴシクの寺に這入つて何か深い莊嚴の中に入つたといふ心地のするのとは全く違つて、はでやかで整つた調和の中に入つた心地がする。この宮殿の様な寺の中にも參詣の人はやはり祈念をこらしてをる。懺悔室には懺悔の人が多い、婦人もあれば男もある。懺悔の聲が柱の影壁の影に微かにきこえる。然しこの聲はやはりゴシクの薄くらがりの高い柱の邊できく方が適當してをる。寺を出てそのぐるりにある入口の上部や柱の彫刻を見る。此等もルチサンスの宮殿裝飾の様であるが、亦一種の面白味はある。寺の前のカフェで茶を飲むで尙寺の正面を眺める。日光は西に傾いて白大理石を照らし、その輝いた壁や柱が碧空に聳える様は去り難い心地がする。

それから道幅の狭い町を通る。全く古風に外側には窓も少なくて、

中庭には彫刻などの立つて居る屋敷がこの狭い道を挟んで、殆ど壁のトンネルを作つてをる。それを通りすぎると元の城壁の残りのある木立の道に出る。道に沿ふていくつも寺がある。皆古風のロマテスクの建物を正面だけ變なバロック風に變へたものである。寺の傍に僧院があり、その向ひは兵營の側をすぎて、少し山手の停車場に行く。そこからは市街を見下す、赤瓦の屋根のゴタ／＼かたまつた中に堂母の圓塔が莊嚴に聳え、町のあちらは又高い山で、その頂上の家が日に照らされてをる。この山に上ると北はアルプの山と、南はロンバルドの平原を眺めるといふ事であるが、時間がないから行かなかつた。

汽車は五時にコモを出て、間もなくキアツンに着く。こゝはスイスとイタリアとの境で税關の検査がある、車を出て税關に行けといふから、何も荷物はなはいといふと、荷物はなくとも行けといふ。それな

ら税關のお役人にこの椿の花でも見せやうといつて、車を出て税關を通り、汽車の時間の間に少し市中を見物した。移民會社の事務所がいくつもある。皆この邊のイタリア人がアメリカに行く移住の世話をするのである。この様な樂地のイタリアやスイスにさへ落ちつかず、金を目當てにアメリカの石炭の畑の中へ行く人間が多いのかと思へば、憐れは一しは増す。

キアツンを出て汽車は北に走り、ルガノの湖畔に出る。夕日がジェネロンの岩山、高峰の雪を照らし、湖水の面には夕暮れの黒い色が蔽ひかゝる頃ルガノに歸つた。

食事の後、尙薄くらがりの山水を眺める。月は大空に碧白い光を放つてをる。家の前に行く馬車の馭者がのどかさうに何がイタリア語の歌を歌つて行く。

ガルニエから手紙が來た。卯月八日とキリストの復活祭との似

た事や、それから子供エヅリヌの事など書いて来た。

四月十日。 山上の眺め、學校、音樂、家庭。

今日も晴天、いかにも春めいた暖い天氣。朝おきて暫く縁側で春の日光に浴びて後、九時から電車で町の南端に行つて、ここから齒車でサルワトレン(San Salvatore)の山に上つた。山は湖水から六百メートル、さう高くはないが、一方は小山や野と、一方は湖水の岸に直立してをるので、上るに従つて四方の眺めは開ける。北西の方にアルプの連山が段々に見える。頂上に聳えた岩角に出て見ると、湖水は脚下、通る船は全く木の葉の様で、四方の山々は高さを増して見える。東の方のソルダの岩山、昨日行つたコモ湖上の雪の山、それからルガノの四方を圍む山、北から西に當つてはアルプの最高峰ユングフラウから、その西につゞく雪と岩との山が、天半に聳えてづらりと並ぶ。

その雪の峰も段々西に遠くかすかになつて、先は氷が水に浮いた様に、碧空の中に消え失せる。暖い日光を浴び、そよ吹く春風に吹かれて、この眺めに對し恍惚と自分を忘れて、身は大空に解ける様に思はれる。遠の山々は雪、近い野には花、湖水は深碧、その間に直立した岩山の頂に村人は堂を建て、キリストを祭り、それで此の山をサルワトレ(教主)の山といふ。堂の日なたに小さな花の咲いたのを紀念に摘んで、山を元の齒車で下り、宿に歸ると晝食。

食事の後にはピニヤミ氏と一緒に、市で立てた女子職業學校を見に行つた。校長はレンシ(Renshi)(此も雑誌の上で朋友)の夫人で、學校の設備や教室を見せてくれた。職業には意匠や裁縫が主であるが、意匠はアメリカの様に直に天然から取らずに、模様の線を教へ、歴史の順序で古代から今までの裝飾や彫刻を寫させ、それから進で天然から取つた自分の意匠をやらせる。此はイタリアのやり方である。

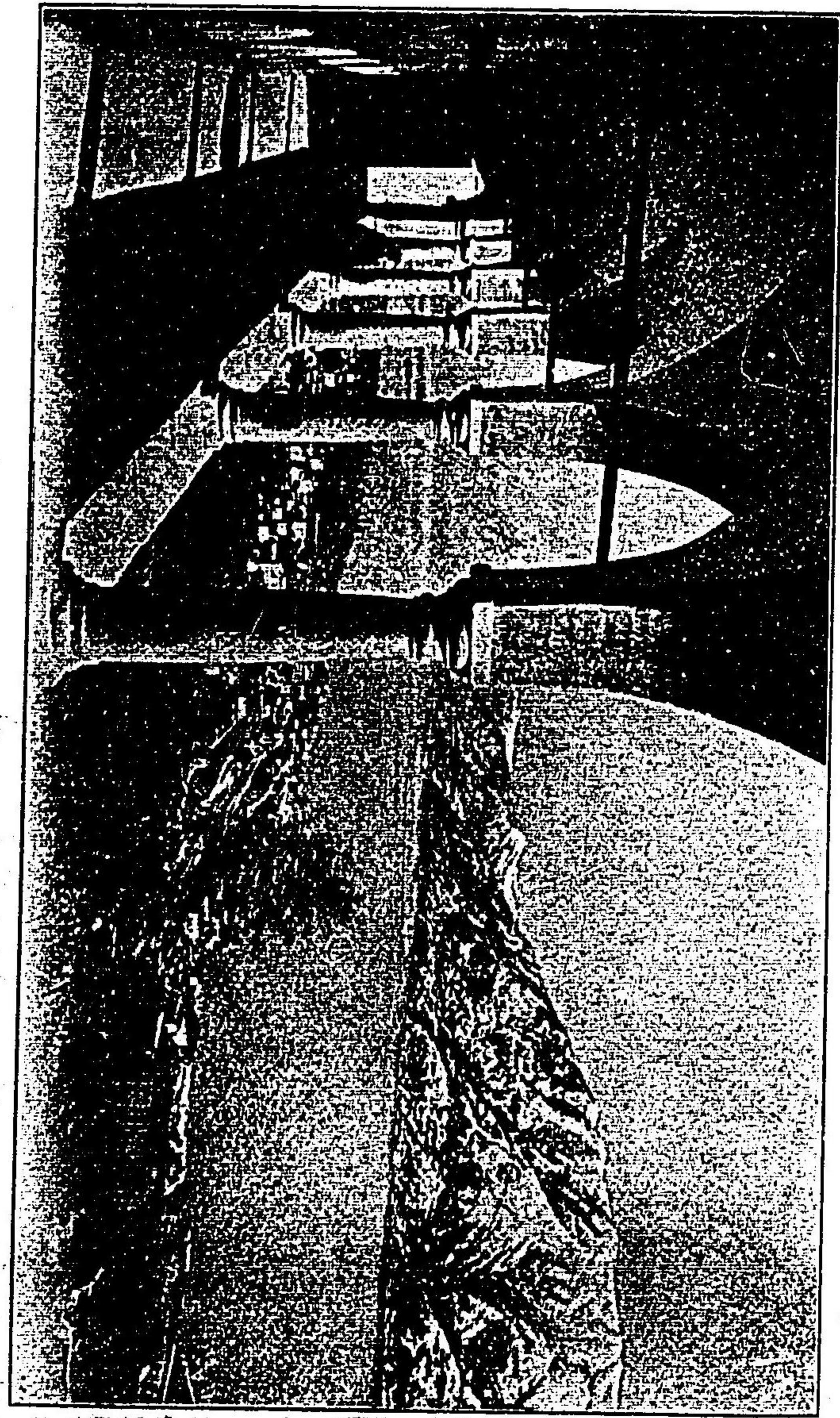
との事。アメリカの様な歴史のない國には始めから天然寫生で始めるが、イタリアの様な歴史の國には、やはり歴史に據る必要がある。語學の教室ではイタリア語の時間に行つて見たが、讀本の中にイタリア人の旅行記で横濱の事を書いたのを讀んでくれた。美しいイタリア語で、日本の事を美しく、子供の着物の色合や、市場の模様を面白く書いたのを遠い外國で書けば、何か遠い昔に見た事を夢で思ひ出す様な感がある。それから英語の時間を見たが、十四五の女の子が一年足らずの間やつたにしてはよく進歩してをる。少し英語で別れの言葉を云つて、尙その外の教場を見校長に別れを告げて學校を出た。

三時半からシャブリツ夫人 (Fräulein Schablin) の娘がピアノをやるが、らきゝに来てくれといつて約束したので、ピニヤミの夫人と妹と子供が一人と、學校の前に来て待つて居た。それで皆で一緒にシャブリツ

ツの家に行つた。此の夫人は北の方のスイスの人でドイツ語の國から來たので、ドイツ語でも話し、それから音樂の先生も來て、令嬢はピアノ、先生はキオリチでイタリアの音樂者テリンデリ (Trindeli) の作をいくつもきかせてくれた。その中で面白かつたのは「悲哀」といふのと「神秘」といふのとで、イタリア作家の風として何れも音色に富んで居る。悲哀は悲哀でも悲しさに熱情があり、色合があり、悲みを喜ぶ、悲みに狂するといふ風がある。神秘も深いといふよりは不思議の配合といふ方で、いかにもイタリア氣風の情熱がある。最後にベートーエンの「月光」をひいてくれたが、色のない月光の中に空に亘る深い音がひびく。色もなく情もないが、奥があり力がある。僅の音樂合奏ではあつたが、實にイタリアとドイツとの對照をきかせて貰つた心地がした。尙色々話しをして辭してその家を出たのは日のくれ近くで、夕日がいつもの様に山々に紅をそめて居る。

夕食はピニヤミの内に招かれて、レンシ夫人も來、イタリアうどんの御馳走で、食事の間にも色々の話しが出る。ピニヤミ夫人は佛敎の禪定が面白いといふ、レンシ夫人は反對で、禪定は好んで心を空にし、自らを癡醉する様なものだといふ。そこで自身はこういつた。「自分で賢くなるのはやさしいが、自ら求めて愚になるのはむづかしい。特に人は常に周圍に心をひかれて、自ら賢うなるよりも、賢く見せやうとするから、禪定で自ら愚になるのもその僻を直すだけにでも役にたつ。それから色々の例を出して議論に花が咲いたが、子供等はねむさうにしてをるし、十時もすぎたから、辭して、ピニヤミ氏と一緒にレンシ夫人を山の下り口まで送つて歸つた。月が曇りのない空に碧くてらして、四方はうす黒く碧い。その間に山々の雪が空に浮いた様に見える、山下の湖水は眠つた如く黒く湛えてをる。月光を仰いで、晝にさいたベトトエンの月光を思ひ出して宿に歸つた。

(四回頁参照)



ピニヤミ夫人の寺

今宿でこの手紙を書く時、下の方に笛の音がきこえる。尙一度縁側に出て月を仰ぎ、山々の雪が影の様なのを見て、これからねる。

四月十一日。ロカルノ、聖母堂代議士。

朝早く起きて窓を開く。日の出前の白いあかりが黒い山の影の上にはのめいて居る。鳥ははや歌ひ囀つて春の朝を告げる。今日は東京ではボートの日、今年の結果はどうであらう。八時過ぎに朝飯をすまして湖水を眺めながら、丁度今頃は隅田の河では文科の勝敗を決する時だと思ふと、何となく千里を隔て、も皆が旗を振り、聲を上げて居る様が見える。

春の暖い日光をうけて縁側で聖フランシスを讀み、十時に汽車で北の方のロカルノ(Locarno)に向つて出た。ピニヤミの子供等はその見はらしの庭に出てハンカチーフをふつて汽車の出で行くのを送

つてくれた。ジュピアスコまでは來がけに通つた路ではあるが、崖の高見から見た、テチノ (Ticino) の谷、ロカルノの湖水、山の麓の桃畑、春の朝日影に尙愉快に見える。ジュピアスコからはテチノの河の側、平原を西に過ぎて、ロカルノの湖岸に沿ひ、右には花咲く山村、左には湖水を隔て、白雪の峰。十一時半にロカルノに着いた。それから直に齒車で山に上る。宿屋や別荘の青草の庭、木立の茂つた間を通つて、段高く山に上る。岩上聖母 (Madonna del Sasso) の堂が行く手に聳え、その堂に上る岩の阪道に小な御堂が並んでをる。堂の傍で車を出、その上の、此も岩の上に建つた宿に行つて、その縁側から湖水を眺める。聖母の御堂が岩角に突き出て、湖水の碧水の中に赤瓦の屋根が著しく見える。程なく正午の鐘が音楽を奏する。その音が湖上の空に響き亘つて、四方の山に傳はる。その最後が餘音を止めて鳴り止むだ時には、氣が鐘の音と共に大空に浮き出す様に思はれた。

霞たつ岩の御寺の鐘の音は

水をわたりて鳴りやみにけり。

湖上の景色を眺めながら、食事をしてゆつくり休んで後、聖母の寺に行つた。岩角に堂があり、堂に連つてフランススキャン派の僧院が、此も岩の上に築き上げてある。石段をつたい、僧院の廊下を出ると堂の前に小な庭が出来て、二階作りの様な正面に壁畫が一ぱい畫いてあるのを見上げる。柱とアーチとの多い屋敷づくりの様な寺の壁に、赤や黄色の多い畫があつて、それが碧空と對する様は可愛い御堂といふ感がある。中に這入ると飾りが多すぎる。紺青色の天井に星が畫いてあり、柱や壁には心願成就の額が澤山かゝつてをる。五百年前に此の岩の上に聖母が現はれ、病氣平癒の靈驗があつたといふので、此の寺が出来、此の邊の村人の信仰相應に聖母の像は錦の着物を着、王冠をいたゞいて、禮の額には日本のと同じ様に、この聖母

が病室に現はれた書などがある。村の婦人が参詣してをるが信心深く何か祈願してをるらしい。それ等は別にして、左の小御堂にチセリ (Ciseri) の書がある。何れの點から見ても整つた落ちつきのあつた、キリストの死にはしても、何となしに死なずに眠つてをる様な顔つきから、その體が全幅の中心になつて、他の人物もこの中心に集るなど、畫の大きさに關係する點が、實物の前に立つて始めて知り得た。一時間近くも見て居ても飽かぬが、いづれは別れるものと思つて、舊知の友に別れる心地をして堂を出た。

堂の横が岩の上で廊下になつてをる。その柱の間から日光をう

けて湖上の景色を眺める。畫は畫、天然は天然で、何れも眺めは飽かぬ。

元の市中に出て、此の地の名家で、代議士のピオダ (Sieg. Pioda) といふ人を訪ふた。前に古い僧院があり、小な庭の茂みには先代の記念碑の立つてをる古い家の戸をたゞいて名刺を出す。二階に導かれて應接室に行くと、古代の武器や何かで飾つた古風の室で、主人の姪であるといふ老婦人が出て應接をして、主人は今來客があるから暫く待つてくれといひ、日本の事などきかれる。その中に二階からおりて來たのが主人のピオダ氏で、小作りの六十近い人であるが、君の論文なども見、此の地に來られるのを待つて居た、書齋へ行つて話さうといつて、二階の書齋に行く。廊下や段階も何か古城の様で、書齋には澤山の本があり、その中に一寸見ると佛教に關したのものもある。此の人は學者ではないが、歴史や哲學に通じて特に佛教が好きで、印

度や日本の事も中々よく知つてをる。ロマ教會の現状、ロスキニの事、スイスの現在などきいて、一時半餘も話しをして家を出た。

まだ汽車の時間には一時間もあるので、湖岸の道を散歩して、水に垂れた柳の木影に休み、それから山手に向つて葡萄畑をすぎて町に歸り、五時半に汽車はロカルノを去つた。西の方の峰に黒雲が起り、夕日の光りが雲を通して湖上に長い光を垂れてをる。七時すぎにルガノに歸つた。汽車の通るのを見てビニヤミの子供二人がハンカチーフをふつてをる。汽車を出ると、ビニヤミ自身が他の二人の子供をつれて迎ひに来てくれ、一緒にその家に行つた。

今晚もイタリア風の米料理でビニヤミ一家と共に食事をした。ロカルノ行きの話しやピオダ氏との會話を話し、それから妹がピアノを引いてくれた。ノルマの曲で、古のドルイド僧が月夜に行列して神壇の前に出る、物すごい様で而かも跳りの節のある曲。それか

らシシリアの俗曲などきいて、十時すぎたので辭して歸つた。家を出て見ると、雨は降つてはをるが、月の光りが雲間からもれて、湖水は山の間死んだ如く、黒く静かに見える。

今日のポートはどうであつたか、心にかゝつても仕様がな。あすは佛誕會に人を招く。

四月十二日。佛誕會の茶會。

昨夜の雨氣は十分に去らぬが、朝から雲間に日かげが見える。今日は日曜で寺々の鐘が湖水をわたり山に響いて、あちこちにきこえる。午前は手紙かきと讀書とで過ごした。

中食はビニヤミの家で、ミラノから来た、此も雑誌の上での友人のフランチといふ人も来て、一緒に食事をし、米料理を澤山たべた。今日の佛誕會には誕生佛の畫でもほしいと思つたが、ない。ビニヤミの

夫人は、誕生佛の代はりにバンビノ(一番下の男の子)をつれて行かうといつて居たに、そのバンビノは昨夕から少し熱が出たのでねてをるといふ。食事がすむで、バンビノが目をさましたといふので皆で行つて見ると、少しよくなつたか、寝臺にねたまゝにおもちやを持つて遊んで、皆の來たのを見てにいと笑つて居る。フカンチをさして「此は誰れ」といふと「アチ」といつて跡は考へて居る。「よくお休み」といつて手を握つて下におり、宿に歸つて、佛誕會に人を招く用意をした。

一つ座敷を借りて、机にも花、壁にも花、誕生佛がないから、芳崖の觀音を中央に、梵天と無着とを兩方にかけて、そのぐるりを花で飾つた。此で先づ座敷は出來た。それから日本服を着て待つてをると、間もなくシャブリツ親子、ついで、ビニヤミ一家とフカンチと尙一人ルガノにをるスコットといふイギリス人と一緒に見えた。卯月八日の佛

誕會の事や、日本の繪の話など、今日はイギリス人でイタリア語の上手の人が居るから、こちらの言葉の足りない時には、英語でいつてその人に通辯して貰つた。茶を飲み、菓子を食べ、机上で尙各々思ひ／＼に話しをして、皆も愉快に、こちらも愉快に午後をすごして、七時前に皆の人は歸つた行つた。縁側に出て、皆の行くのを見送り、互にハンカチーフをふつて、*rivera*をくり返した。

今に佛教の精舎が建つて、鈍色の衣を着た比丘の住むべきルガノの地に來て、小いながらに知己友人の一團を招き、花を飾つて佛誕會の心だけを盡した。來た人も喜んで花を持つて歸つてくれた。こちらも何となく心地がよく、この一日を喜びの中にすごした。只遺憾であつたのは、レンシ夫婦の差支と、尙一人、ロマ教會の坊さんで、ビニヤミの友人が、此も先約で來られなかつた事である。その外はイギリス、ドイツ、イタリア諸國の人が集つて花の中に、宗派や人種の事

を考へずに佛誕會の茶を飲む。今度の旅行中での一番の愉快であらうと思ふ。

夕食の後に同宿のイギリス人で昨夜から熱が出てゐる人を訪ふて、晝の花を一つやつて来た。月は今雲間からかすかに湖上を照らし、山々には尙雲が迷ふてをる。机の上には花が香つてをる。

四月十三日。イギリス人の家庭。

朝から曇り然し鳥はいつもの様に朝早くから歌ふが如くに鳴いてゐる。朝は手紙をかく、荷物を整へる、曇り勝ちの天で時々雨もふり、外にも出られぬを幸に半日宿でゆつくりくらしした。

午後にはピニヤミの家に行つて雑誌などを見、三時すぎに夫婦と一緒にスコット氏(Mr. Scott)の家に行つた。スコットはカスターニョラ(Castagnola)といふ村でルガノから半里餘の處に住んでをるから、船に

乗つてその村に着き、湖水の岸から山の手に上る。山の崖、石垣の上にスイス風の田舎家がある。それがスコットの家で、庭に這入ると先づ女の子が迎へに来、それからスコット夫婦、外に二人の男の子も来て、その家の二階に通る。庭には杉の種類のアルプの高山植物もあれば、棕櫚や枇杷もあり、その間に澤山色々の種類の薔薇が植ゑてある。二階から湖水の眺めは又た一段で、サンサルプトレの山が正面に直立し、南の方湖水の上に橋が遙に見え、左は又ジェネロン(Generoso)の高山、近江の石山を大きくした様の景色。スコットの細君はオランダ人で、室内にはオランダの畫や、日本の漆器があり、静かな湖水の山の上に静かな生活をしてをる。茶を飲む。話しはイタリア語と英語とで各自由にする。世界の中で茶の好きなのは、イギリス人とオランダ人と日本人だといつて、スコットと自分とは頻に茶を飲む。ピニヤミ夫婦は、よくそんな強い茶が飲めると云つて驚く。日のくれまで愉快

にその家にくらした。夕日が雲間から湖上の山々をてらして、ルガノの町は西の方に影になつてうす暗く、東の方の山々は紅を染める。別れを告げて今度は電車でルガノに歸つた。

宿に歸ると夕食の半、スイスの歌唄ひが來て鳥の鳴く様な歌を歌つてゐる。このスイス歌も暫くはきかれぬ。食後にはイギリス人で十五年印度に居たといふ人と話しをし、それから病氣でねてゐるイギリス人を見舞に行つたが、復熱が上つたといつてをる。慰めて今自分の部屋に下りて來た。

四月十四日。最後の一日。

今日も雨朝はフランシスを讀んで、中食前に丘の上の村を散歩したばかり。ルガノの眺めも今日が終りと、ぶら／＼そこらをあるいて來た。

午後は佛教に關して批評があつたのに對して佛教の事についてビニヤミの雑誌に出すため原稿をかいた。ライプチヒには佛教の會が出来る、ルガノには精舎をおこすなど風聞をきいて、牧師連の間に少しのほはて出した氣味があつて、新聞や雑誌に時々佛教の惡評が出る。何れも議論としては取るに足らぬものであるが、捨て、おくよりも辯明しておいた方がよいと思つて、一つ書いたのである。夕はレンシ氏がイタリアから歸つて來たので、一緒にビニヤミの家に招かれて夕食。食事の間も食後も日本や佛教に關する話しをした。レンシは佛教よりも印度哲學が好きで、東洋と西洋との道德の違や何かについて中々議論も出た。ビニヤミ夫人や妹が何か日本語を聞いておいてくれといふから、法然上人の流罪の時の歌、露の身はここかしこにて消えぬとも書いて解釋をつけておいた。會者常離で、數日の間親しく交つた人にも別れて又いつ會ふか分からぬ。春

Olorosa foriera d'aprile,
 dalla terra sei nata pur ora,
 come in petto di donna gentile
 nasce il primo pensiero d'amore.
 Il tuo fior sulla zolla appassita
 è la speme che il mesto rincora,
 il sorriso che manda la vita
 al cessar d'un acuto dolor.
 Tra le nevi che l'aura discioglie
 io ti colgo, o romita de' prati,
 io delibo dall'intime foglie
 la tua molle fragranza vital.
 E mi duol che parola non sia
 quest'arcano d'efflivi beati.
 Oh sonasse nell'anima mia
 come nota di spirto vocal!

(Andrea Maffei).

つれてくる頃には、精舎に比丘と共にパトリの經文を讀む事が出来やう。

の日和、雨の天に親んだルガノの天然にも別れて又旅に出る。此からフレンツェ、アッシンなど数年の間夢にした地に行つても、又それを去て他に移る。人生逆旅の如しとはよくいつた言で、人生も此の旅に似てをる。然し旅でも他國でも人情は同じで、友人も出来る。子供等まで今日は別れの夕食だといつて送別の意を表してくれる。無常の人生即ち美しい人生であるつくづく思へる。

宿に歸りがけに雲の間に月光がもれ、山が高く湖水は深く眠つて居る。何れの人もこの天然の様に寂靜の心で安樂である様に。今日晝論評を加へた佛教の批評家も僻見を去つて佛陀を敬する様になりたい。あすはポロニヤ、あさつては花のフレンツェで、十字の御寺にキリストの遭難の金曜をすごし、日曜にはフエンレに行つて、神を目の前に見た畫師アンジェリコの跡にキリストの復活祭を送らう。此がルガノ湖畔の最後の夕、この次はいつこゝに來るか、正見坊を

廻廊の町ボロニヤ

四月十五日。ミラノからボロニヤ。

今日は終にルガノを去つた。ビニヤミ一家はステーションまで見送つてくれた。僅に九日の滞在ではあつたが愉快な家庭の間に日を送つたその地を去るのは家を出る様な心地がした。

汽車からルガノの町を見る。湖水を見おろす。カステリオ子のスコットの家は湖水の岸に見える。宿もビニヤミの家も後になる。その中にトンチルを一つ出ると、今度は湖水の遠つた方に出て、あららにワルソルダの岩山が雲を含んで墨繪の山水の如く見える。それも程なく山に隠れる。ジエチロソの麓の花、それからつゞく田舎の村々を過ぎて、十時前に國境のキャッソに来て、此處で今度はイタリアに入るためイタリアの税關検査、その時間が一時間もあつて實に馬鹿

げてをる。然し税關の中で聖フランシスの傳を讀んで、フランシスがいつも人に苦められても怒らなかつた數々を見ると、此の位な事に短氣をおこしてはならぬと思へた。

十一時すぎに汽車はキャッソを出て、間もなくこの間來たコモの湖水を通る。湖上の眺め、岸の別荘の景、いつ見ても畫の様である。それから今度も長いトンチルを一つ出るとロンバルドの平原、見渡す平野のあちこちに黒雲がおこつて、時々きびしい夕立が来る。野の草はあくまで緑に、畑の間の木立には若芽が十分に出て、それが夕立にぬれ、雲間からもれる日光にてらされる。夏が近いた心地がする。

ミラノ(Milano)に着いたのは一時半。前に一度は來ても尙見たいものも澤山あり、フランチ氏も來てくれといつては居たが、復活祭までにはどうしてもフレンツェに行きたいから、ミラノには泊らぬ事にして、三時半に汽車が出るまで二時間だけ堂母を見る事にした。ステ

ーション前から電車で市中に行く。夕立がはれて日光が強く照らし、公園の木立が美しく、市中の人出も中々多い。見覚えのある町を通つて行く間もなく行手に堂母の冠塔や尖塔が見える。その前に電車を下りて堂の前に立つ。全體白大理石の大殿堂が日光にてらされ、つくつくと立つて居る尖塔の上には、一つく聖者の像が空に向つて居る。柱も壁も窓も入口も皆何かの立像で飾つてある。それ等の裝飾が集つて三角形の中心に集まり、真中の尖塔が著しく天に聳え、その後には又寶冠塔が聳える。いかにも完備した建物。記憶には留まつて居なかつた立像、入口の彫刻、戸扉の銅の刻物(聖母とキリストとの一代記)一つく、とつても立派な彫刻ばかり。然しフランスやドイツのゴシックの様な莊大森嚴の趣はなくて、只立派、美しい、そろつたといふのみで、何となく物足りない。北方のゴシックならば、尖塔が飽くまで先に尖つて大空を突く様であるに引きかへ、その肝

心の尖頭に人間の像が立つてを、子供が木に上つた様に見える。この立派な完備した建物でもゴシックの本當の精神がうつらない事が愈感せられる。

堂内に遣入ると、お祭前で参詣も中々多い。その數多い人が大きな堂、高い天井の下に小さく見える。堂内の柱や天井も亦大理石で花の如き彫刻、それから美しい色ガラスの畫、外部に劣らず立派であるが、パリのノートルダム様の奥ゆかしさがなく、窓が大きすぎて花ガラスの畫も餘りにゴタ／＼して見える。然しそれにしてもいかに、もそろつた裝飾で、よくもこれだけの複雑な裝飾を一つの堂に集めてまとめたと思へる。

又外に出て四方から眺める。横からの眺めが一番立派で尖塔の集まり、寶冠塔の高さが特によく調和してを。後からは窓ばかり見え、前からは三角が平たく見える缺點を除いて、横から斜に見ると、

いかにも信仰で作り上げた、天上の神を讃嘆するための建物と見える。

尙堂の前で茶を飲んで、はがきをかきながら堂を眺め、時も来たので、別の道を電車でステーションに歸つた。三時四十分に汽車は東南に向つて出る。野の草木の緑愈々深く、緑の世界。それに又雨が来る、雲の間に西日がさす景色の中にポー河の河原を南に渡つて、ピアセンツァといふ處に着く。こゝへ来ると南の方にアベニチの山々がひくく連つて見える。それから先は又一面の平野で、野の草が青々と敷物の様に、そこに何といふ木か、脊の低い木が直線に並んで、木と木との間に葡萄のつるがかけてある。その木の列が見渡す限り遠く連り、その間に處々赤茶色の壁に青の扉のある田舎家が立ち、又立派な地主の家は御殿の様な作りで、その前には木立が平行して長い並木をなして居る。どこまで行つても同じ平原に同じ景色。そ

の平野に雨が来たり日がてつたりし、あちらは黒雲に雨の脚、こちら日は日が青草の上に照るなど、此處にも夏が近いたと思はれる。パルマの町、モデナの町、何れも同じ様に古い寺の塔が幾つとなく立つて、遠い處から見ると寺の塔の集まりに見える。日本の町にはこの眺めがないので淋しい。

東南に進むに従つて山々が段々近くなる。日が入つて少しうす暗くなつてから、右の丘の上に城廓の様な寺の赤壁が緑の木々の上に見える。程なく汽車は七時半にポロニヤに着いた。宿の馬車に乗る頃はもう街々にガス燈がついてゐる。町に這入ると、古い城壁、白大理石の樓臺、廣場の記念碑、兩側廊下の様な通路のある町、皆何れも詩か歴史でのみ見るやうな處。町の中央の廣場には人出が多く、その中に、白色の天幕に青光の電氣燈をつけて四方おつびらいた氷店がある。熱帯の町に來た様である。

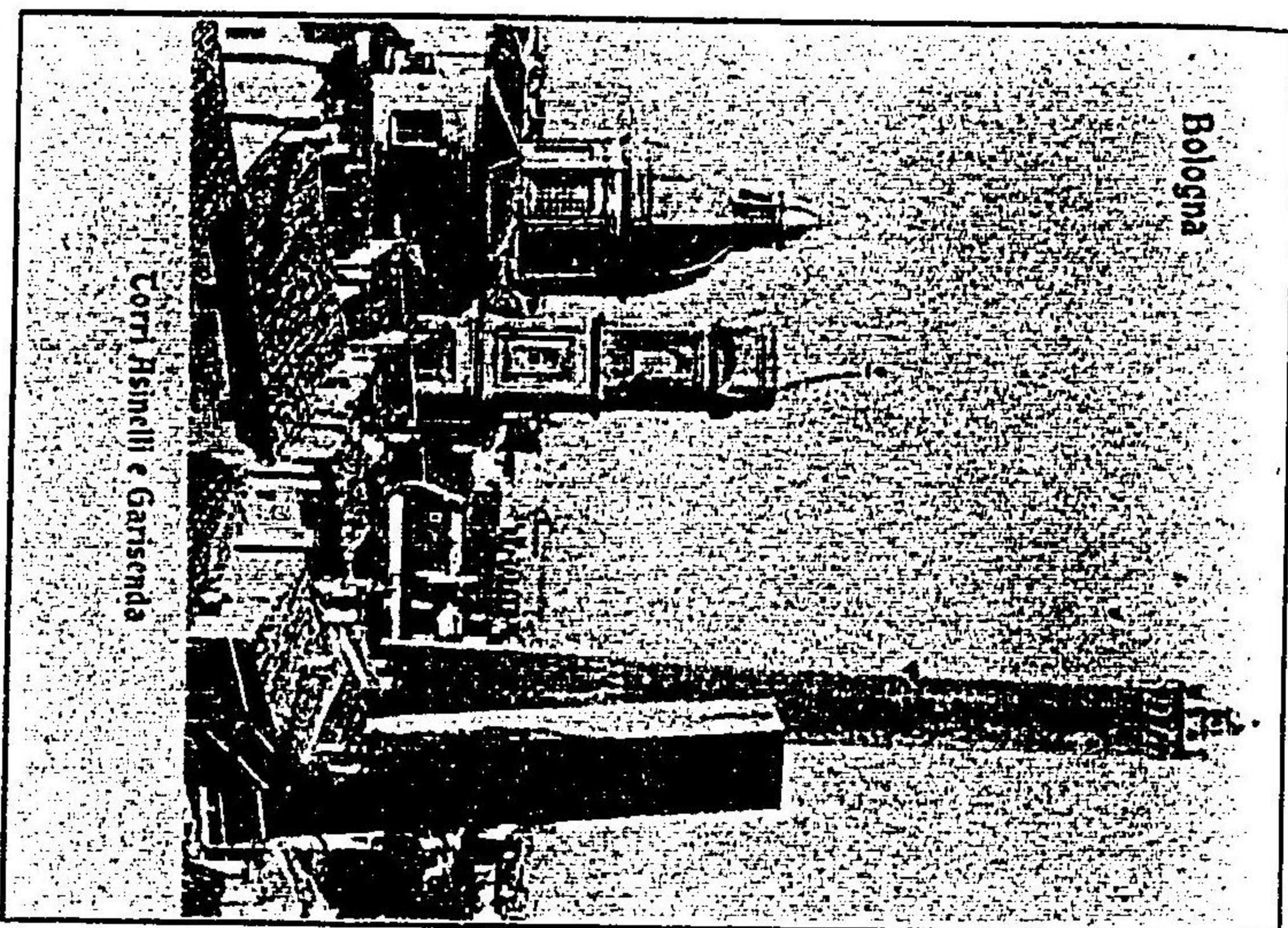
宿に着いて夕食の後、暫く新聞を見、市中を見物に出た。先に氷店を見た廣場に来て見る。古い城廓の様な建物が西の方に聳え、東と北とはやはり廻廊の様な通路のつた家。それから先に行くとうす暗がりに空をつく大きな寺。近よつて見ると入口の彫刻が何百年かの年月に黒ずんだのが夜のあかりに見える。その寺から曲つて北の方、古宮殿の間には天をつく塔が二つ。只真四角の柱の様な姿で、何百尺かの高さに聳えて、その一は少し西に斜にも、一つは東南に、よほど斜に傾いてをる。その間に立つて上を見れば、二つの大きな棒が地の底から、鬼か何かの力でつき出されて斜に横に出たかと思はれる。雲間に出た満月の光もかすんで、空はうす暗がりに二つの塔のみ著しく立つてをる。實に妙な眺め。

四月十六日。中古の形見の寺々

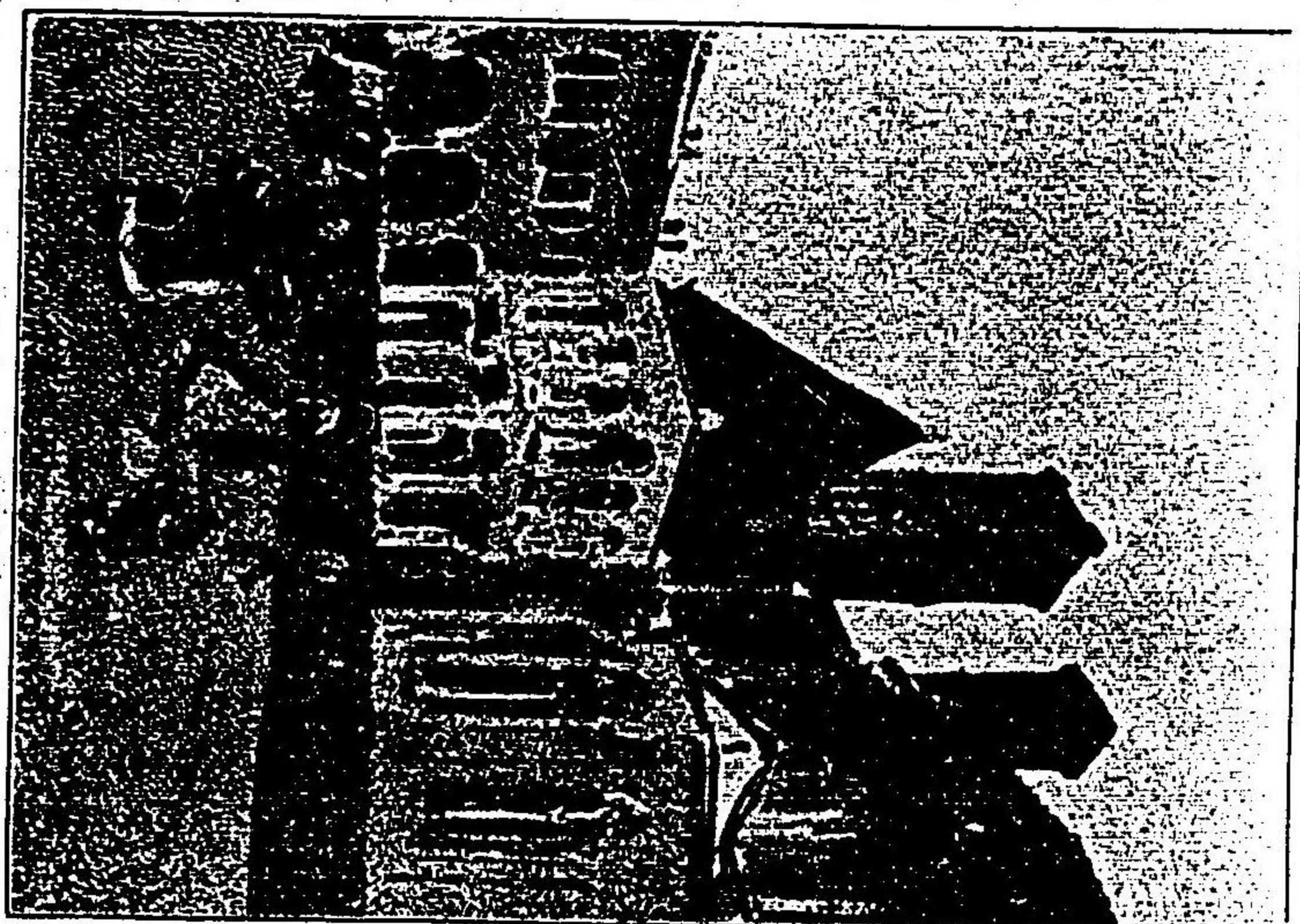
今日は一日、全く四百年前の世界でくらしした様な心地がする。このポロニアの町は十六世紀の末に昌へて、ルネサンス美術の最終の掉尾をなした地で、今も殆ど昔の姿で残つてをる。寺や社殿ばかりでなく、町家や街路も餘程古風がある。今日は一日その中で面白い世界にくらした。

ホテルの廊下には、古風の畫が澤山かゝつてをる。中にはラファエルの寫しの古いものもある。壁や敷石にも種々の大理石が澤山使つてある。家の造りも屋敷風になつてをる。それから町に出て、昨夕の廣場に行つて見る。夜目に見たに違はず、全く城廓の様な古の市廳。ぐるりの家は皆軒が深く出て廊下(アルカド)といふが通行になり、壁は何れを見ても茶色で、窓の扉は緑。窓かけの巾をガラスの内におろさず、外におろしてある。その色も濃茶色。道には帽子を着ないで、唯きれを頭に纏ふてをる婦人や、袈裟に似た様な巾を外套の様に

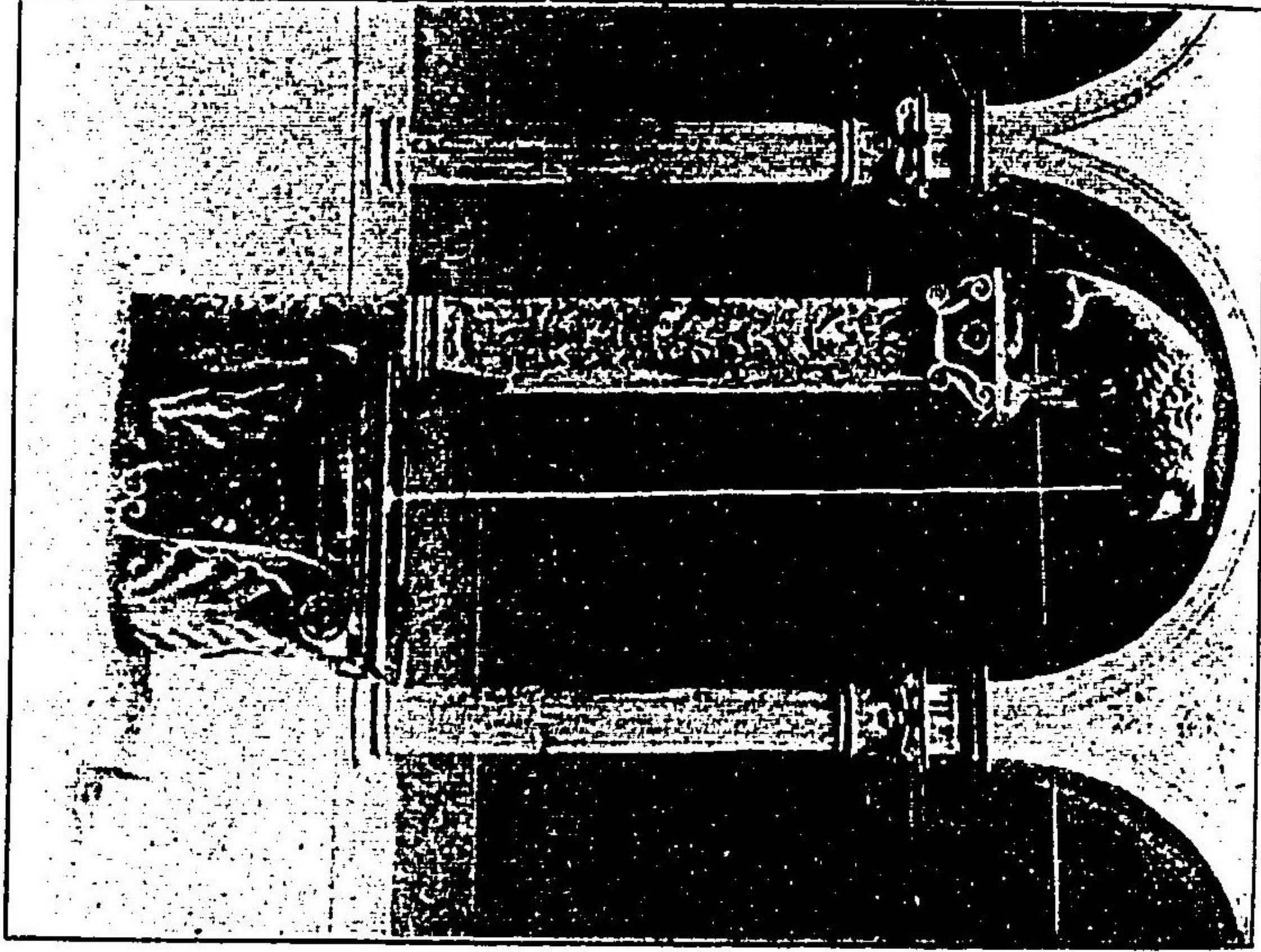
被てをる男や、何れものんきさうにぶら／＼してをる。婦人の頭の巾は黒地に青と紅との縫ひのあるのもあれば、又只の茶色のもある。見渡した處茶色と緑色との世界で、その間に古い建物の壁が黒ずんで見える。この廣場から此も昨夕見た寺に行く。聖ペトロノ(Petronio)といつて、此の町の守護になつてゐる聖者の名にとつた大きな半出來の堂。正面の廣大な下の方だけに黒と白との大理石で柱があり、その間にまだ稚氣を脱せぬゴシック風の彫刻があるが、上の半分も横の方もたゞ煉瓦を積んだまゝで、その上に大理石をはりつける様にギザ／＼に煉瓦が出てをる。然しその半出來が却て大さを増して見せる様に思はれ、何か巨人の前に立つた様である。中に這入るとあすの祭のこしらへに裝飾をしてをる。參詣もゴラ／＼してをれば、旅客で案内記を手にしてうろついてをる人もある。左右の小御堂には色々の時代の壁畫や彫刻がある。ざつと見廻はつて



ボロニの街並 (六二頁参照)

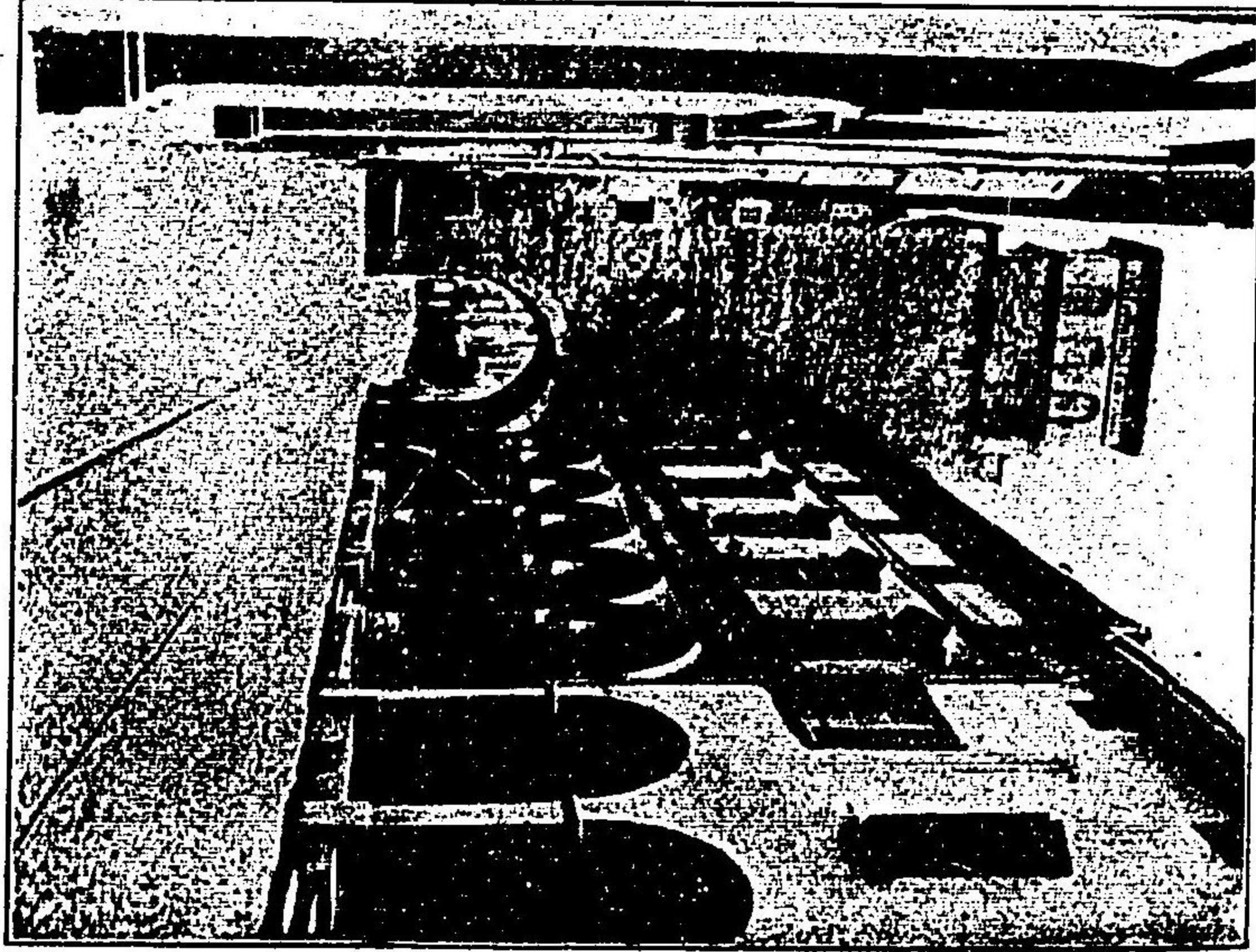


ボロニの聖ペトロノの寺 (六六頁参照)



(一頁参照)

光三、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百



(参照九六)

光三、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

左の方に來ると、その小御堂の一つ戸を開いて禮帽を着た番人が旅客を案内して彫刻の説明をしてをる。そこへ這入つて一緒に見る。その堂はパチオッキ (Capella Baciocchi) といつて、ある貴族の棺がある。その大理石の彫刻は近代のものではあるが實によい作である。それから又別の堂を見る。此はこの寺で一番古い壁畫が残つてをるので、六百年の古を忍ぶ。左は天國と地獄との畫で、天國の聖者が學校の生徒の様に机に並んでをる。下は地獄で色々の鬼や罪人がある。食欲の餓鬼もあれば、邪見の罪人もある。鬼の大きな口や、劍の手、罪人等の頭下足の姿や、餓鬼の腹の大きいのが實に面白い。見るに従つて新しい點が出てくる。外の人たちは出て行つたが、後に残つたのは自分と外にイタリヤ語の上手な人と二人であつた。二人で永い間見て、その人と話しをすると、井ーンから來た人で歴史家だといふ。よい人となつて、尙外の堂を見てあるく。古の城門

にあつた十字架や、生死の戦の繪や、色々の人の棺の彫刻、一々かけない。ギーンの人には前に一度美術史の先生と一緒に來て話しを聞いたので、多少は知つてをるといつて色々説明をし、又堂番に聞いては話してくれた。尙その人と話して見ると、此からロマへ古文書を調べに行くのであるが、このボロニヤに居るベキラカ(Berincan)公爵家に關係の文書を見せて貰ひに行く。今日一時に行く約束だから、それまで一寸そこらを見てあるく、差支がなくなれば一緒に見にあるいて、日本の話しもききたいといふ。イタリヤ語は上手なり歴史家ではあり、願ふてもない幸だから一緒に行くつてくれといつて、それから聖フランセスコ(San Francesco)の寺に行つた。此も外側は瓦ばかりの殺風景な寺。堂の後に柱でつきあげた妙な辻堂の様なものがある。此はこの地の大學の教師で古の法律學者の何とかいふ人の墓で、ボロニヤには此種類の墓が多いといふ。柱を十數本で、高さを二間も

の上に棺を置くとは妙な風があつたもの。堂の中に這入ると、中では拜壇に花や燈明で勤行中。幸ひ本當の拜壇は修繕中で板圍がしてあるから、番人にあけさせて這入る。立派な大理石の彫刻で十四世末のメッセニエ兄弟の作。ミラノの堂母を小さくして一ツの屏風形の拜壇にした様な作で、ルチサンスの初の時代の眞面目がある。堂内に外のものもあるが、それ等はざつと見て、今度は町を東の方に行き、昨夕見た斜塔の下に立つ。ダンテがその「地獄」の三十一章に、地獄の巨人が頭の上からのぞきこんだのに比べてをる通りで、二ツ大きなおぼけが頭の上から倒れかゝるかと思はれる。尙東の方、聖ジャコモ・マッジョレ(San Giacomo Maggiore)と云ふ寺に行く。其町は全く兩側ともアルカードで、御殿の廊下の如く、其柱の頂の彫刻も面白く、壁の處處に古い石が出、廊下を通して見ると町はどこにつきてをるか分らぬ。ジャコモの寺も外側は何でもない、入口の柱の下に面白い師子

があるばかり。中に這入ると近代の畫があり、壁もぬり代へて新しい。拜壇の後に、此も法律の先生の墓があり、その棺の横の彫刻には法衣様のゆつたりした着物を着た學生が並んで聴講してをる景がある。後の小御堂にフランツエスコの畫の聖母がある。ルチサンスの畫の熟しかけの名家で、精神が満ち、技倆が生き／＼してをる。人物の口つきに一種の滋味のあるのが此のフランツエスコの特徴だと説明して貰つて、いかにも妙な口つきだが、そこに力がこもつてをると思はれた。堂番の婆さんが先をいそいで横の方の戸をあけて行く。ついて行くと、中庭から暗い廊下を通り、又別の堂に這入る。今は拜壇も何もないが、兩方の壁は畫ばかり。此が聖セチリア堂で、壁畫はその一代記、フランツエスコやコスタなどの筆で、いかにもよく保存が出来、且つあかるくて見よい。處々妙な姿勢や無理な配合はあるが、色の工合からセチリアを始め人々の信仰の顔つき、背景の山水

など實に見處があり、心のこもつた畫で、此等もラファエル前の傑作、信仰はあり、技倆も進んで来た、ルチサンス畫の花であらう。この堂の後に古い城壁の残りが出て居る。その壁に穴の様な家が薪屋になつて居るなど奇妙の配合である。

その町の先には大學。此も古い建築であるのみならず、この大學はパリと並で世界最古の大學である。建物の中に這入つて見たが、大學といふよりは御殿の様で、特に休み中で静で、此も何だか古の世界に歸つた様な心地がした。

それから又遠ふ方角に行つたが、どの町もどの町も廻廊町。その廻廊と廻廊との間に狭い道を電車が通るなどは、實に似つかはしくない。廻廊を廻はり／＼して、此も古い御殿の裁判所の前から、横に聖ドメニコ (San Domenico) の寺の前に出た。少し廣場になつて、四方の家は例の通りの赤茶色。それに常緑の並木が添ふて面白い色合ひ。

そこにガリレオの大い像があり、堂の前に一つ、家の角に一つ、例の高
 檜風の墓がある。聖ドメニコの入口の彫刻は中々よいが、その他は
 例の如く瓦ばかりの殺風景。内部はその反対に白壁に金色の飾り、
 小御堂の一ツ／＼に各何か畫や彫刻のよさうなものがあるが、そ
 れ等は一々見ず、一番大切な小御堂で聖ドメニコの棺の据ゑてある
 のを見る。全體はルチサンスの少し飾りすぎたものであるが、棺の
 前を白大理石の屏風の彫刻で飾つて、それに聖ドメニコの一生があ
 り、又上には聖者や、兩端には蠟燭を支へる天使が、何れもルチサンス
 の頂點を示す作である。聖フランツエスコの拜壇はおとなしいが、
 こゝのは中々力がある。

この堂の先に一つ小さな小御堂があつて、その拜壇には、自分の好き
 のフキリッポリツビの畫がある、聖母に四人の聖者。先のフラシツエスコ
 のと相對して、フランツエスコのはまだ芝居氣があるが、リッビのは上品

で、方の表はれや色の技倆もフランツエスコと相譲らぬ。人はラフエ
 ルのみを賞讃するが、その前に出てラフエルの先に立つた人の中に
 こういふ名工が澤山出たのであると思ふと、ルチサンス美術の宏大
 な事が分かる。聖ドメニコを出て、ベネラッカ公爵の家を見に行つた。
 此も外側には僅の浮彫があるのみであるが、中庭を圍んで柱の並ん
 だ廻廊、その上の開いた縁側から、庭の中央にある師子の泉など、ルチ
 サンスの上品な作りで、又如何にも住み心地のよさうな家、中世の
 貴族の生活が忍ばれる。ギーンの人と一緒に米料理やマカロニで
 中食をし、少し話してからロマの再會を約束し、別れて宿に歸つた。
 午後、又夕立が來た。そのはれるのを待つて山の上の聖ジョ
 ヴァ(San Giovanni in Monte)といふ寺に行つた。山の上といつても、少し地
 面の高くなつたまゝで、他の住家と壁を合はせて立つてをる。此寺
 には只コスタのマドンナが見物であるが、光が暗くて見えない。も

一つ聖フランシスの祈禱してをる畫がある。畫としては何でもないが、フランシスの像であるから、此も暗がりの中に見て、家の間の廊下を通つて寺を出た。それから路の汚い處を通つて古の城門を市外に出ると、町の南の方の丘が連つて、その木立の中に赤や黄の家が處々にある。雨ががりの天にその麓の公園に休んで、それから丘を上る。林が段々深く、眺めは少しづつ高くなる。その頂上に古は寺で今は病院になつてをる家の庭が、臺の様になつてポロニヤの町からその邊の平原全體を見はらす。斜塔を始め寺の塔がつくくくと立つて、その下に赤瓦赤壁の家が一むら集つてポロニヤの町を作り、その先は青草の野、葡萄畑の木立の間に同じく赤や茶色の家が、平原の縁の間に色どる。遙か向ふには少し小山が見える。一望平坦の野ではあるが、塔や赤壁で色や形の面白い配合を作る。高臺が直立の崖に臨んでをる處から西の山々を見ると、椽の木の若葉がふさふ

さと青く、その間にシプレスや杉の黒い木立が交り、その先はゆるやかな山手にうねくとした道に沿ふて白い花が咲いてをる。一方はどうしてもイタリアの光景で、遠い方の花の山は丸で四條派の畫。長い間この景色をあちらこちらと眺めて、丘をおりる。その道は一つの公園になつて、草原の新緑とシプレスの木立とを配合し、草の間にはマゲリテやサフランの花が亂れ咲いてをる。下から山の上の寺を見あげると、蔦の一ぱいに這ふた石垣の上に、赤壁の古僧院がシプレスの間に見える。人工で天然に一種の可愛い趣を加へてをるのがイタリアの景色に畫趣を添へる。

山の下から電車で市中に歸り、堂母に行つた。此の堂は内も外も此といふ事はない、寧ろ俗な建築である。今日の遭難木曜の勤行が濟んだ處で、堂の内には香煙が立ちこめ、參詣の人が堂内に群集してをる。拜壇の下の穴にも何か聖體を祭つて人々がそこに參る。金

色の拜壇、金色の龕が燭光にてらされて、其前には穴倉の暗がり、人が跪いて禮拜をしてをる。此も一種の奇観。それから小な町を通りぬけて北の方の公園に行つた。その間にも貴族の宮殿が貧民窟と一緒にある。貧民の家に二階を腕木で支へて道に出してをる様は古畫(リッピ)の畫いたベテロの貧民施與のまゝである。公園には馬鹿狂言の様な見せもの、前に黒いはねの帽子を着た兵卒や、わんぱく小僧が立つて見てをる。その廣場のぐるりは例の茶色の壁の家、此も畫。公園の臺から北の平原を眺め、又市中に歸つてはがきなど買つて宿に歸つた。

食後尙一度斜塔の月夜を見に行つて、雲間の月影におぼけの様な姿を見て歸つて來た。今日は午後から休み故、夜はふけても町が賑か、で窓の下には歌を歌つて行くものがある。その節工合が何とな、く印度のに似て居る。此からねる。あすは花の都フレンツェに入る、考へるだけでも愉快である。

四月十七日午前。大寺畫廊。

午前はボロニヤで送つた。ペトリニノの堂にある壁畫の中、天國と地獄との畫は何度見ても面白い。その隣の小御堂には十六世紀頃の畫であらう、作は拙いが面白い畫がある。キリストが十字架にかゝつてをるのを中心にして、その十字架の四端が赤い袖の手になつて延び、上の手は鍵を握つて天國の門をさし、下の手は何か棒の様なものを持つて地獄の戸を抑へ、左の手は劍をとつてその下にをる人物で猶太教を表はしたものの、頭に劍をさし、右手は寶冠を持つて、ロマ教會を表はした童女の頭にのせてをる。猶太教の人物は羊にのつて、その羊のからだも負傷し、四脚ともに折れてをるに反して、ロマ教會の乗つてをるのは羽のある師子で、いかにも威勢堂々、猶太

教の人物は巾で頭をしぼられ目を閉ぢられてをるに反して、ロマ教會はうれしさうな顔をして、その片手に持つ盃を出してキリストの胸から出てをる血をうけ、その血の中央には白い球で聖晚餐のパンを畫いてある。十六世紀頃に血なまぐさい考でロマ教會の神聖を主張した跡が此處に現はれてをる。

堂を出て電車で例の廻廊の兩側にある所を通つて、繪畫館に行つた。第一の室がギドレニの作。パリにあるマクダレナなど小な作を見てはレニも名工と思つたが、大作になると、色を色々に遣ひ分け配合に苦心したばかりで、少しも精神氣力がない、日本の古の芝居の看板を見る心地がする。その次の室も又同様。その次か、又の次かにはベルジノのマリア戴冠と、ラファエルの聖セチリア(Cecilia)とがある。此のみは見物。ベルジノの畫は先にトールルーズで見たのと同様の作、人は非常に賞める。落らつきがあり人々の顔にしつかりした顔

つきが表はれてをるだけは流石にベルジノである。ラファエルのセチリアは、教會で音樂の靈としてをるセチリアと、そのぐるりに四人の聖者を畫いたもの。淺黄の薄衣ゆかたに、素足のまゝで立つた一少女。その兩手は今鳴らしたオルガンをさげ、顔は上を向いて、自分の鳴らした音樂の遠く天空中に響き亘るのにきゝとれてをる。

その顔の神々しさ。響き亘る樂聲は碧空を超えて天上に一群の天使の合奏となつて表はれてをる(ラファエルがこの空氣と、天上の境を分けるに苦心して碧空の割れ目を作つたのは、名工でも已むを得ない方便であらう)。セチリアを圍んだ聖者の中、右は薄紅の衣着た美少婦マクダレナが首を上げて同じく樂聲のひゞき亘るのに氣を奪はれ、左は聖ポーロが大きな(比例上大きすぎるかと思はれる)強さうな男で、地についた劍の柄に片手をかけ、片腕をあごにつけ、首を俯して音樂に沈思してをる。さすがにラファエルの作と感服して長い間

見て、次の室に行つた。そこにも澤山畫はあるが、フランツエスコのマドンナが面白い。特にそれを昨日見た聖ジャコモの堂にある同様の畫と比べると一層面白い。殆どベルジノの作と同じ品格がある。その外コスタのもあり、又別室にはチャプ風のもあつたが大體見たのみで、尙一度聖セチリアの前に立つて、館を出た。

歸り路に復聖ジャコモに行つて、今見たフランツエスコの作と堂内のとを比べ、も一つ昨日は十分に見なかつたセチリア堂の繪を見た。セチリアの結婚(フランツエスコ)もよいが、コスタのセチリア施與の畫が一番よく、貴婦人が貧民の間に施與してあるく高尙さ。その背景の山水も中々よい。

それから歸りに尙一度斜塔の下を通つて宿に歸つた。

都の繪里の花

La gloria di colui che tutto move
per l'universo penetra, e risplende
in una parte più e meno altrove.
Nel ciel che più della sua luce prende
fu' io; e vidi cose che ridire
nè sa nè può qual di lassù discende;
Perchè appressando sè al suo disire,
nostro intelletto si profonda tanto,
che retro la memoria non può ire.
(Dante, Paradiso).

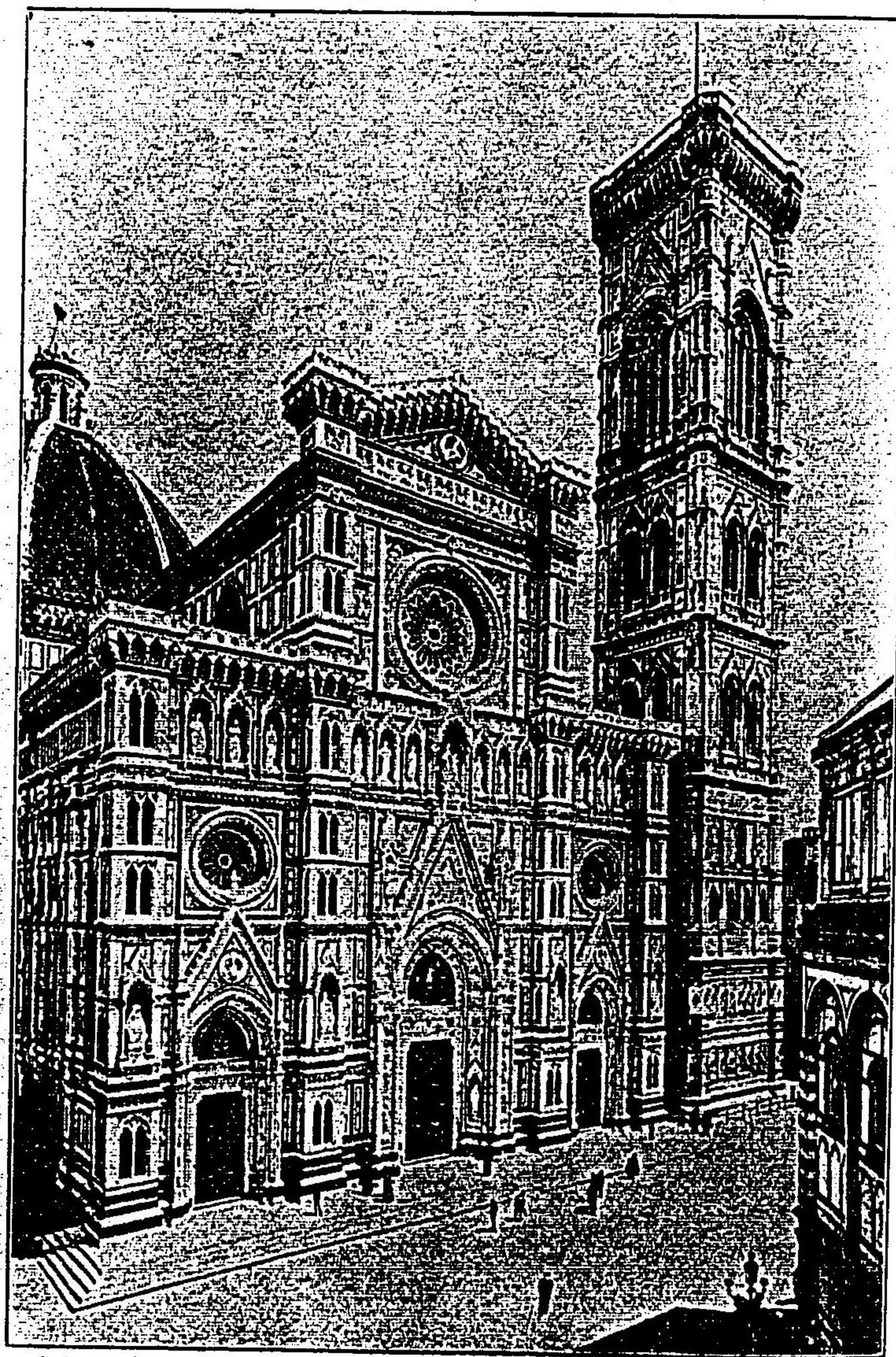
ダンテが天上光明の中に聖者の姿を見、下界に歸りてその光榮を物語らんとして歌ひにし述懐。是れ實に余がフランツエスコに對する追懷を公にするに當りての感想なり。三十三篇の樂國記にダンテは、宇宙に遍き大神の光榮を歌ひしも、我れは憐むべき日記に「花の里、繪の都、詩聖の故郷」の面影を忍びて獨り自ら慰むのみ。

四月十七日午後。フレンツェ到着、十字の御寺。

嗚呼今日は再び久戀のフレンツェに着いた。

ポロニヤも面白い處ではあるが、フレンツェを目の前に控へては、二日の見物をすまし、重荷をおろした感をして、早々に別れを告げ、一時に汽車で辭し去つた。ポロニヤの寺々、特にペトリニノの本堂や斜塔はいつまでも著しく見えたが、それも終に丘に隠れて、路は山中に入り、レノの河原は段々急流になる。丘の上の花畑の代りに岩山の骨が露はれ、大分山中の景となる。朝の好天氣に引きかへて又夕立が來た。ボレッタ(Polenta)といふ温泉場で修善寺に似た處も、この鐵道の最高點(六百餘メートル)のブラツキアも雨の中に過ぎて、いくつもとンチルを過ぎると、南西にかけて大きな谷が眼の下に開け、トスカナ(Toscana)の平原が雨氣の中に表はれる。山を下るに従て又花の世界、その間にはオリヅの黒青や菜種の黄色が彩をとる。大分山を下り

フレンツェの堂母並に鐘樓



(八三頁一〇六頁、四六三頁参照)

ると直下にピストヤの町が平原の間に一群をなし、寺の塔が著しく見える。その寺の塔も程なく見上げる様になり、汽車は東に轉じてトスカナの平野を馳せる。北は今通て來たアベニ子の連山中には雪の峰も聳え、その山の麓が斜に平野に逼る邊には、村もあれば別荘の立派なものもあり、古城壁や塔が散見し、その間は一面にオリヅの畑、處々にシブレスの木立。ロンバルドの平野の如くに規則正しい畑でなく、木立や畑や村が色々に散在して却々趣があり、家の壁も紅よりば白茶色が多く、そこの趣が山の北と全く一變した。行くに従つて此のあたりの野は時候が早い、花は散つて若葉の出たのが多く、特に樺の若葉が美しく、武藏野の樺の若葉を思ひ出す。内の庭の向ふの樺も今頃はこんなかと思ふ。

萌黄なす樺の若葉のトスカナを

なぞらへて見ん武藏野の春。

山の上の村々、古城、寺塔、段々近く山の麓に沿ふて走る。行く手の東には白雪の峰が見える。あれがアルノ(Arno)の河上プラトの山と思ふ間もなく、大圓塔と四角の塔とが巍然として見え出した。此がフレンツェの堂母、ジオットーの作つた鐘樓。身は實に花の都と名の付くフレンツェ(Firenze)といふのはラテンのFlorentiaで花の都といふ事に近づいたのである。五年半の昔に残りおしく去つたアルノの河端の都、イタリアの京都、今は再び眼前の光景に這入つて來た。

五とせは千里の外に夢に見し

フオラのみやこ今夢ならず。

故郷をこゝに移せし花の里、

行くとやいはん、歸るとやいはん。

畫のみやこ、花さく春に歸り來て

いく日はこゝに中つ世の民。

汽車はステーションに着く。荷物を持たせて宿の馬車に乗り込む。そこらに居る馬車には大きな蝙蝠傘をひろげて、その下に馭者が眠つてをるなど、どうしても二十世紀の世界でない。馬車はサンタ・マリア新御寺の前をすぎ、五年前の宿に着く。部屋を定めて直に宿を出、白黒の大理石で築き上げた堂母の大伽藍の莊嚴も片手に見たまゝで、いそいで聖十字(Santa Croce)の寺に行つた。

フランスを出る時には、復活祭の一週間を聖フランシスの故郷アッシシですごすつもりであつたが、道で日をとつて、行きおくれたから、せめてフレンツェで、聖フランシスに縁の深い聖十字の寺でこの金曜——キリスト遭難の金曜をすごしたいと思つて、ミラノの見物を略して急いで來たのであるから、何より先に此の寺に來た。寺の前のダンテの像、寺の正面の白大理石、昔ながらの姿を見て、飛び立つ思ひをして堂の中に這入り、ダンテの墓なども見ず、直に堂の一番奥のバ

ルデ小御堂 (Cappella Bardì) に行つた。

この御堂には正面にフランシスの像横の壁にはジョットー (Giotto) の筆のフランシス一代記がある。その中でこの聖者の臨終の畫、それを見て此の日の終りを告げやうと思つて、その畫の前に立つた。家には寫真もあり、始終それを眺めて、その中の光景人物皆親しくはあるが、その畫の前、六百餘年前の刷毛の跡を見れば感は又一層深い。今や呼吸絶えて靈は天上に去つて行く聖者の顔は、半ば生きてをる如く、笑みを含むともなく、安慰寂靜の姿。その頬骨の高さには一生の苦勞が名残を留め、その真直な鼻筋には萬人を感化して一代の聖者^{じよ}と仰がれた氣高さが現はれ、閉ぢても尙喜びの溢れた眼には、自らを擲つて神と人とに捧げた歡喜を満え、しまつた兩の唇には尙神を讚じ、衆生を教へ、キリストに祈りながら呼吸を引きとつた跡が見える。枕元近く跪いて天を仰いでをる一人の老年の弟子は、聖者の靈



聖フランシスの最期 (ジョットー筆、聖十字の寺)

が天に上つて行くのを眼のあたり見て、信服鑽仰の色を現はしてを
る。嗚呼この畫、この聖者の徳を慕ふて、圓熟した畢生の力を注いだ
ジョットーの筆の跡である。日はくれに近く、堂内はうす暗くなつた
が、尙聖者の姿はよく見える。眼をつぶり眼を開いて見ると、その臨
終の姿が生き／＼と動く。

畫の前に立つて見てをる間に幾人も旅客が見に來た。或る人は
一寸堂に足を入れたばかりで、その中には何物もないかの様に出て
行く。或るものは只此がジョットーの作だといつて去る。或るもの
は案内につれられて、此の畫は跡で筆を入れたから駄目だと案内が
いふのをきいてそのまゝで去る。見るにつけきくにつけ、その人等
を憐れにも思へば、腹立たしくもある。聖者の入滅の姿に對しなが
ら心は内に動く。然しつく／＼考へて見れば、此く人々の見物に心
が動いて、直に自分とフランスとのみ相對してをる心持の三昧に

入れぬ。心がおちつかず、人の事が氣にかゝるのは、まだ自分の修行が足りない。特に此の畫を畫として見、その畫の見方を自分は心得てをるといふ様な慢心があるのではないか。この慢心即ち佛陀も聖フランシスも嚴に戒められた心である。キリストが自ら卑うして、終に今日の此の日に十字架にかゝつて身を終つたのも、此の慢心を殺した最大のためではないか。この金曜に此處に来て、聖者の畫像の前に立つて、尙此の心のあるのは實に恥づべきだと思ひ直した。此の教訓を得た喜びに、もう人が來ても氣に留めぬ、只畫像の前、聖者の臨終の前に立つて祈念をした。

その中に堂内は段々暗くなる。聖者の姿に別れを告げてその小御堂を出、その前の椅子にかけて正面の畫像を遠くに眺めた。金地の中に黒くその姿が見え、その後には聖カタリナとクララとの姿が暗がりにも光る如く見える。暫くそこに坐つて最後の禮をして、本堂

を出た。外には残りの日光が堂の前の白石を清く照らして、その三角の頂上にある十字架が雲をついておごそかに立つてをる。

それから町を通ると、休みの遊び人や旅客が日のくれ前に群集してをる。それ等の人や町の光景には成るべく目をふれぬ様にして、堂母の鐘樓の横に立つて、そこに彫りつけてあるジョットーの作の中で、人間の創造と、耕作の始とを見て、又外の物を見ずに宿に歸つた。

宿に歸つて瞑目すれば尙聖者フランシスの姿がありくと見える。今日の金曜をジョットーの畫の前、聖フランシスの十字の寺で喜ばしく終つた喜びに、心は七百年の前に遊ぶ。

食事後ジョットーに關する本とフランシスの一代記の一節とを讀み、それからあすの用意に聖マルコの寺に關する本を見た。そこで考へるには、この花の都、詩の里、ルチサンスの本據に來ては、どうしても心がルチサンスの華麗な美術に奪はれる。此處一つ決心をして

アッシシを経てローマに行くまでは聖フランシスコとジョットとフラト、アンジエリコとのみに心を凝らさなければならぬ。ラファエルにせよ誰にせよそれ等の畫には目を向けずに、二人の畫聖に集中しなければならぬ。フランツに來てラファエルを見ないのは御馳走を前に置いて斷食するに均しいが、斷然この斷食を實行しやう。ルチサンスの御馳走は浮世の珍味である。いくらラファエルが聖母を畫いても人間世界のものである。それに勝れた醍醐味を嘗めるには浮世の斷食をしなければならぬ。ジョットの信仰、フラト、アンジエリコ(Angelico)の法悦に出來た畫は天上の不死の味である。それさへあれば他は入用なしとなる修行をしやう。此う決心をした。人は何と見るとも、又自分にも苦しくとも、ルチサンスの美術は見ない。只リッピ(Lippi) マサッチオ(Masaccio)との畫だけはアンジエリコと同じものとしてそれもブランカッチ堂だけを見やう。この覺悟であすから見

物、否巡禮をしやう。今日の一日、日のくれの二時間は實に有りがたい教訓を得た。

四月十八日。 聖マルコ神に恵まれし畫師。

フランツに來ると繪に酔ふてしまつて、一日に見て來た繪の事を考へ、何時間でも考に耽る事が出来る。文章や言葉でいくらその面白味を書かうと思つても、筆は眼に見た事にとても追ひつかぬから、日記や記事をかくのがいやになつてしまふ。此の前に來た時も、それで遂に日記すら書きつけなかつたが、今度は一つ奮發してかけるだけ書いて見たい。晝に見た事を思ひつゝ、けてその樂みに耽けると、いつまでも切りなしに考へるから、大奮發で筆を執る。

朝半日は聖マルコ(San Marco)の寺で送つた。おきて見ると日影がさす。朝飯の後暫く休むで聖マルコの廣場に行つて見る。その古

僧院の壁が日にてらされ、廣場の杉松などの緑と相映じ、木影には草花の紅や紫が咲き亂れてをる。これからこの寺の中で見るべき畫の作者アンジェリコもこの様な春の朝に天地の美を眺め、その中に神の力、神の智慧を見て筆をとつたのであらう。この僧院は今博物館になつて、十時から開くので三十分も間がある。その間廣場の椅子にかけて、春の朝の景色を眺め、又この僧院の過去をたどる。あの何でもなく見える壁一つの中には何百年かの間幾多の修道僧が朝夕を送り、信仰の生活をした跡である。その中には聖アントニオ(St. Anthony)の如き徳僧も出て、その道德で時の大名貴族を感化し、その慈悲心一つで貧と疾病とに悩む幾萬の市民を救ふた。又サヴォナローラ(Savonarola)の如き熱烈の人も此の中に出て、その雄辯の説教でフランスに燒き殺されるまでも少しも恐れず撓まなかつたのである。書物

を出してその最後の説教を讀めば實に血の沸く感がある。彼れはこの僧院の長としてその法子に告げた。

『今神の前に汝等法子に告ぐ。今この聖餐の前に立ち、我が敵已にこの僧院に迫る間に立ちて、我は我が教への信なりし事を確め得たり。余が常に汝等に告げし事、今神より來れり。この市民がかくまでも速に擧て我に敵せんとは思はざりしも、此も神の御意なり。余が最後に汝等に告ぐべきは只一事のみ、曰く信仰と忍辱と祈禱とを汝等の武器とせよ。余は今敵の手に渡されん、汝等を驚きと恐れとに委せん。余が敵は余を殺すや否や知るに由なし、されど一事の確實なるは、余は天に上りて汝等の爲めに盡さん、恐らくこの地上にてなせしよりも多く汝等の爲めに盡さん。心を安んせよ、十字架を抱け、十字架、是れ汝等が救ひを得べき道なり。』この大悲劇もあの壁一重の中に起つた事である。かゝる熱烈の人

を養つた同じ壁の中には、又天地の間に逍遙して神徳を讃嘆し、神の示現を受けて筆をとつた畫僧も居た。今自分はその人の信仰の筆の跡を見に行くのである。待つ三十分の間は懐古の夢にすぎた。博物館の戸は開いた。多くの旅客と共にその中に這入つた。

入つて直に廻廊に圍まれた中庭に行く。常緑の木立青く、古僧院の静けさは旅客の靴の音で破れた。廊下一面皆古の修道僧の棺を埋めてある、その上を歩んで、直に正面の壁にある十字架の畫の前に立つ。名利のためでなく道樂でなく、只信仰のため神から授けられ示現せられたと思ふだけの事を書き、筆を下す前には祈禱し禮拜し、キリストを畫く時には喜びの涙を流しつゝかいた人。そのアンジェリコが自分の住まふ僧院の廻廊の正面に畫きつけて、朝夕、兄弟と共に禮拜をしたこの十字架上のキリスト。その身體には血は流れてをるが、已に苦みも悶えもなく、静に首を垂れた死に顔には寂靜の大



(照參頁三九) ロナム者 敬 殉
(原題 ロナム 聖筆 コリエジニア)



備道修ニるふ迎をトスリキ
(原題コルマ聖筆コリエツツア)

(九四頁参照)

安樂が現はれ、そのからだもこの世以上に靈化したもの、如く半は
すき通つた様に見える。その十字架の下に跪き、両手に十字架を抱
いて上を仰いでをる聖ドメニコ(San Domenico)の顔は眼一つに大きな
悲嘆を湛えてをるが、それと共に身も心もキリストにすがりつく
いふ姿が十分に見える。

その横には戸口の上にドメニコ派の殉教者ペテロの半身像があ
る。頭上には傷をうけて血が流れ、右の肩には一刀をさゝれて血が
迸つてをる、それにかゝはらず、殉教者は左手に本をもち、肩をさゝれ
た右手の指を口にあて、沈思の姿。ドメニコ派の第一の徳である
寂黙を守つて、その兩の目は何物かを上に見つめてをる。殆ど恐ろ
しい様な書。沈毅、寂黙、信仰の徳その者が一人の僧に化現した姿と
いつてよい。

廻廊の南側には同じく戸口の上に聖トーマスの像。此はドメニコ

派の學僧、ロマ教會の大哲學者を畫いて、智慧そのものを豊頬爛眼の顔つきに現はしたものだ。アンジェリコの如き信心家でもドメニコ派の特色である智慧學問を重んじて、如何にその最大の代表者を畫かうとしたが、その熱心が此の畫に十分に見られる。

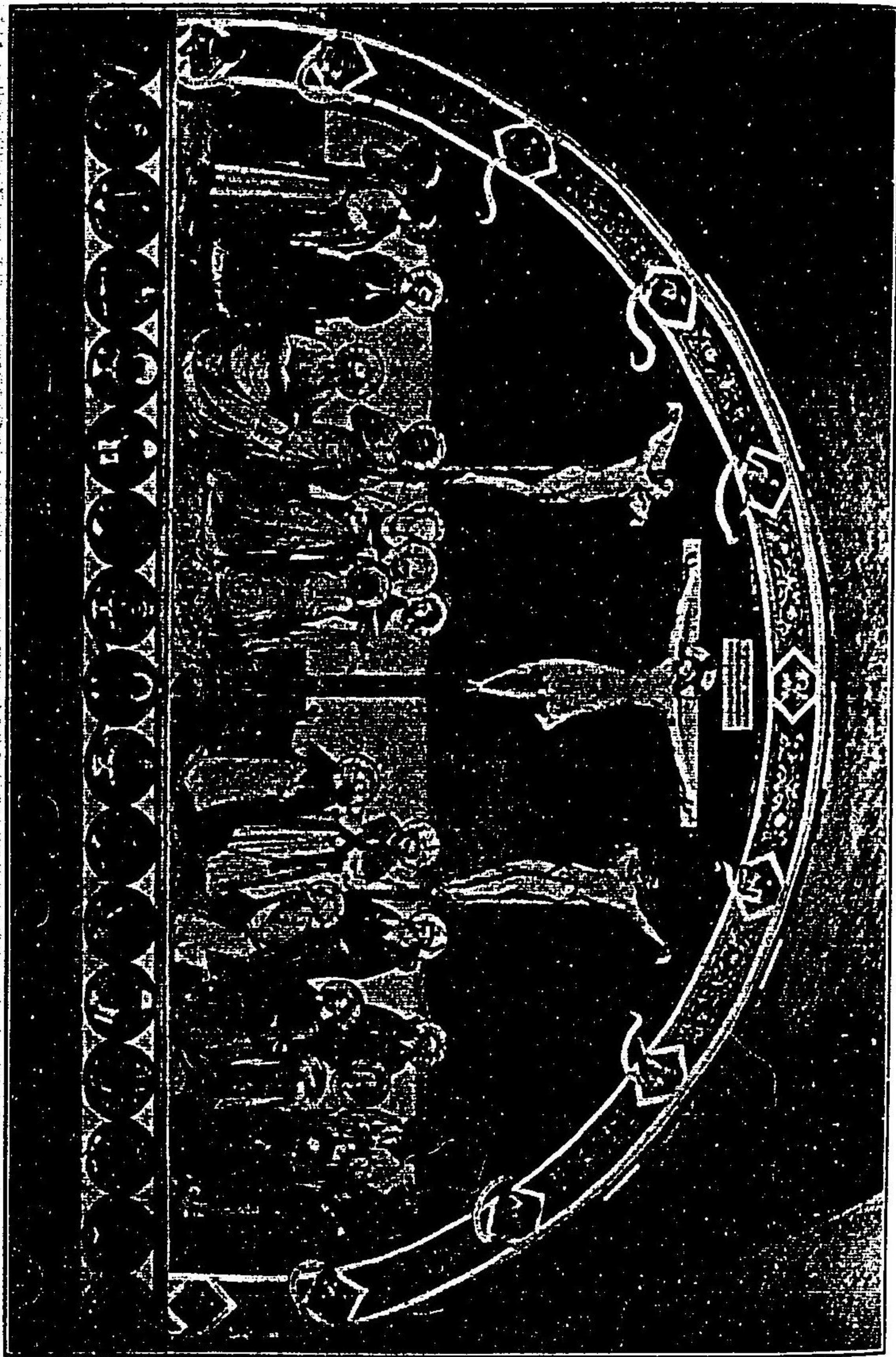
それから次に此も戸口、特に賓客室の戸口の上にはキリストが毛衣を着、杖をついて順禮の姿で現はれて來た。それをドメニコ派の修道僧二人が手を握つて迎へてをる。その兩方が眼と眼と相迎へてをる様、キリストの毛衣の白茶色と修道僧の黒白の衣と相對した工合、靜かの中に情があり、おちついた中に配合の妙を得てをる。

その外にキリスト復活があるが、半身を棺から出した様、單調の色合、他の作と大に違ふ。その畫の妙の分からぬのはこちらに肉體の復活といふ考へがないためかも知れぬ。尙一つ聖ドメニコが書物を示してをる畫ははげで殆ど分らぬ。

廻廊の一方にこの僧院の會議室がある。その一方の壁にはアンジェリコが大きな十字架上の死を畫いた。大幅としても作としても最も有名なもの。廻廊の十字架では背景の空が碧色なのに反して、此の畫は上の方一面に紅褐の色で、その中にキリストの十字架と、二人の盜賊の十字架と相並び、その下には色々の聖者が相並んで共に十字架上のキリストを仰ぎ、或は首を垂れて悲んでをる。全幅に變化を統一した工合、空の茶色と十字架の慘憺と下の聖者の光輪と相映じた案配、實に大作中の大作である。キリストの肉體からは血が流れてをる、身は死してをる、而かもその面のみならず、からだ全體の大安樂の姿が見え、二人の盜賊の中左の方の二人は稍信を起して安んじて死んだのと、他の一人はまだ煩えながら死んだのと相對して十分、その心もちを姿に現はす。キリストを哭してゐる聖者の中、聖母は全く氣を失つて手も靡え身も倒れかゝる。それを前からマ

グダラのマリアが跪いて支へ、聖ヨハネと他のマリアとが後からその腕をつかまへてをる。氣を失つて首を垂れた聖母の顔と、後から支へてをる二人の、悲みに充ちて而かも聖母をいたはる顔と相並むで、一つの大きな人生の表はれ。而してマグダラのマリアが着てをる薄紅の袍と他のマリアの萌黄の下着と、聖母の黒ずんだ茶色とヨハネの薄茶と相映じ、四人の姿が集つてそれだけでも一幅の畫をなしてをる。その四人の左には洗禮のヨハネと聖マルコとが或は立ち、或は跪いて、その端にはフランツエに關係のある三人の聖者の集りで終つてをる。

此の一方に對して他の方は、色々の教團の祖師を畫いて、十字架に一番近くドメニコが跪いて、十字架を仰ぎ、つゞいて聖ジエロームが高位の紅帽を地において、白衣の乞食姿で兩手を合せて跪き、聖フランシスは褐衣に繩の帯を垂れて、右手を頬にあて、左手には十字架を



十字架上のキリスト (フアン・デ・コトニョの繪)

もつて、仰ぐともなくキリストを拜み、その手と足とからは、傳説にいふステグマタが光つてをる。(ステグマタといふのは印といふ事で、フランシスは始終キリストの十字架に手足を釘づけにせられたのを考へてをつたので、終に自分の手足にそのしるしが現はれたといふ)。この三人の間に立つて聖アウグステンとカルメリト派の祖、聖アルベルトとが並ぶ。二人は高僧の冠を着、思慮の深い智慧に富んだ面つきに、徒に悲まず、この十字架の中に大きな深意を見やうとしてをる姿。フランシスの後には聖ベルナルドが本をかゝへて十字架を見つめた沈思の横顔、聖グアルベルトの驚きと悲みとの姿。最後にはドメニコ派の徳を代表する殉教者ペテロと、學を代表するトーマスと相重なつてこの幅をなしてをる。この二人は廻廊にも一人づゝの像があるが、それと比べると、廻廊のペテロは自ら苦みを忍んで寂黙を守る強い顔つきであるのが、此處にはキリストのために泣

かんとして而かもその死に頼る他方の信仰が現はれ、廻廊のトーマスは學問智慧の化現であるが、又こゝにも豊頬爛眼、智慧の相を失はずには居るが、而かもその少し上を見つめた眼の中に激烈の感情とそれを制してその感情で得た力を思想の方に轉じやうとする努力とが十分に見える。

アンジェリコが人物の性格、思想、感情を一つの刷毛の先に現はした力は實に遺憾なくこの一幅に現はれてをる。彼は只顔つきだけでなく全身に人物の心を寫し出して、その姿勢態度と顔つき(特に目つき)に集中して来て、人間の外側に内面の心を寫し出す。この力は實に前後に無比であらう。近頃の肖像畫の名士も多いが、アンジェリコほど力が全體に現はれない。實に信仰の力は恐ろしいものである。

この畫の前に椅子にかけて見てをると、時々日かげがたりたり曇たりする。その變化の中に全幅が活動する。一人々々の聖者を見

つめると、又一人々々生きて、そこにその人が動き出すかと思はれる。一時間ばかり考へたり見たりして後、この室を出、二階に上つた。

二階の階段を上りつめた處に、人のよく知つてをる受胎告示(Annunziazione)の壁畫が正面にあつて、うす暗がりの僧房の廊下に春の天地を齎らした感がある。静かな尼寺の春の曙。院の外には草花が咲き亂れ、院の廻廊には他に人影もない。浮世の塵の跡もなく、人聲もない。その中に椅子にかけた一人の乙女、無垢清淨の心そのまゝのしなやかな姿。そこに天上から五彩の翼をひろげて下つた天使。天使は腰をかがめ、掌を合はせて乙女に禮する。乙女は胸に兩手をあて、答へる。天使の横顔には、無比の慶事、無上の大事を告げしらせに來たといふ歡喜が溢れ、乙女の兩の瞳には、半ば驚き半ば喜び、而かもその情を表はさずに謹んで告示を受ける心を湛える。この光景の中にはキリスト教の不思議な信仰、無垢の受胎の深義が残る隈

なく而かも奥ゆかしく現はされてをる。學者や宗教家の間には色の理窟も議論もあらう、然し世に若し自分の情慾を離れ私情を去つて、全く身を自分の子のために捧げる母親があつて、その母がその無垢の心に一人の愛兒を胎内に宿したと知つた時、且つその子が世界の人類を救ふ大使命を帯びてをると知つた時、その歡喜、驚嘆、感謝、愛情はどんなであらう。アンジェリコのこの聖母が十分に之を代表してをる。若し又世に天使なるものがあつて、この慶事を知らせる役に立つなら、その時の天使の顔つき態度はどんなであらう。天使の示現を受けて刷毛をとつたといふアンジェリコの此の畫がそれを示してをる。世に議論を並べてこの奥義を攻撃する理窟屋も分らず屋なれば、又此を固い教會の規則宗義にした教會も餘り感服は出來ぬ。アンジェリコは只この奥義を信じ、その心持ち、その信仰の内容をこゝに現したのではないか。我々は又理窟や宗義でなしに、この

畫の消息を見たいものである。

それに對して尙一つ十字架がある。殆ど廻廊のと同じの作(ドメニコが左に居るのと右に居るのと違)。その外この僧院の中にアンジェリコの弟子等が澤山同様の畫を残した。此時代の信仰で如何に十字架の死が重きをなしたかを知るに足る。然しアンジェリコはルイテルの如くに法律的に代償と十字架を見たのではなく、キリストの惱、一死といふ點に感情を注いだものであらう。

それから先き左にも右にも通路の兩側に小な僧房が澤山あり、その中には一々畫がある。その中でアンジェリコは、キリストの誕生、變貌、忍辱、復活、並に聖母の戴冠を残した。變貌の姿の如何にも神々しいのや、聖母とそれに冠を戴かせるキリストの空中にある姿の玉か雲かと思はれるのや、又キリストが輕蔑を受けて忍受して而も冒し難き威嚴の見えるのや、殆ど筆舌に絶える。尙この次に十分長い時

間熟視して後、その感を書いて見やう。

これ等の僧房の通路の壁に聖母とキリストの幼童とがある。この幼童、所謂 Bambino、こそ眞に世界を統御する無垢無邪氣の化現で、それを抱く聖母は又その愛兒を撫育して全く他愛のない母の愛の完全な姿である。ラファエルのシステナ聖母も莊嚴であり威儀堂堂で、その幼童の眼中には世界を支配する力があるといはれるが、尙稍覇氣がある。アンジエリコのパンピノには一點の覇氣もなく、而かもその可憐の中に何とも云へぬ威儀がある。ラファエルの聖母には、多少この兒を見てくれと他に對する態度があるが、このアンジエリコの母には兒を愛する外一點の邪氣がなく、他愛ないといふ一語はこの聖母に盡されてをる。パンピノの童眼が眞正面に人を見て、その後、後に母が少し首を傾けてパンピノによりかゝつた様は、全幅に無限の生氣を貯へる。その左右の聖者八人は會議室にもある人達であ

るが、こののは皆立つて敬愛の至情をパンピノと聖母とに注いでをる。その顔貌は殆ど肖像で、會議室の顔をよく知つたものは直にその各が誰れであるかを知り得る。只一つ聖トーマスだけが此處ではまだ少壯の人で、會議室や廻廊の肖像の如くに老成でない。アンジエリコは或はパンピノに對して敬愛の情を表する時には、聖トーマスもその智慧才覺を忘れて少壯の心持になる、その心中を外貌に表はしたものではなからうか。

尙他の僧房に名高い小拜壇に密畫の聖母。その隣には聖母戴冠と三人の賢者の歸敬とがある。何れも二尺に足らぬ小拜壇に多くの人物や天使を畫き出してをる。その筆を見ると實に細かな一筆の中に無限の表現を盡してをる。僧房内の壁畫に近寄つて見ても尙よく分るが、アンジエリコは決して刷毛でなすつて、塗つてはその上を又塗る様な事をせず、日本畫と同じく一筆一刷で仕上げてをる。

如何に腕の利いてをつたかを知るに足る。近世の塗抹式の西洋畫家は油といふ利器を善用して自分の腕をよまかす。彼等はアンジェリコの筆の跡を見て大に反省すべきでなからうか。

半井は實にアンジェリコの信仰の中に這入つてこの畫工が Bato (神に恵まれた人)といはれたその Bato の仲間入りをした心地をして送つた。宿に歸つてはキリストや聖母の像、聖者の姿がありくと見える。その作を見たゞけでさへ印象といふべきか示現といふべきか、これだけの感化がある。それを作り出した人自身は果してどれだけありくと眼前に神靈を見て、それを筆にしたか、想像に餘りある。アフィヨンド「アンジェリコの非ジョン」といふ畫を畫いたのを見たが、聖者や神靈を眼に見てそれを畫いたアンジェリコを畫題にするのも面白い仕事である。アフィヨンの畫は餘り寫實すぎたが、日本でも例へば惠心僧都の觀相など一つの畫題にならう。

聖母と聖子 (アンジェリコ筆)



(一〇二頁参照)

午後は昨日以来の感じを友人に書いてやり、又尙アンジエリコに關する本を読み、それから日の暮に散歩に出た。シニョリア (Signoria) 古の政廳の前から古橋の上に出る。河水は雨に水嵩増して、濁水滔々。聖三位橋のあたり、ダンテが最後にベアトリセに遇ふた時の畫そのまゝの景色。本屋に這入つてアンジエリコの作の寫真や、フザレンツェの風景畫を集めて本屋を出ると復雨。土曜の日のくれの散歩の人が群集して、時々その間を大傘ひろげた馬車が通る。

食後は又讀書、手紙かき、黙想。アンジエリコの畫を想ひ浮べてはラファエルも光りを失ふ心地がして、昨夕の決心を喜ぶ。どうかこの決心の破れない様に。

四月十九日。

復活祭、カルミ子の寺、メデチ家の庭。

眼をさますと外は雨の音、窓をあけて見れば車軸の雨。顔を洗つ

て先づフランスの日光の頌を讀む。

いと高き全能の善なる主よ

光榮と譽れと總ての恵みとは汝にあり……………

Altissimu, omnipotente, bon signore,

tue so le laude la gloria e l'onore et onne benedictione.

七百年前の聖者を追想してこの復活祭の日を迎へた。

朝飯後暫くして直後のロレンツォの寺の鐘、ついで堂母の鐘樓に鐘の音がひびく。この鐘の音が故郷の名物の千本の鐘の音に似てをるのも不思議である。雨をついて十字の寺に向ふ。途上堂母の鐘が頭上に鳴つて雨に和して虚空にひびきわたる。十字の寺に行つてバルデ堂 (Cappella Bard) のまへの椅子に憑つて瞑目する。程なく、その寺の鐘が天上からひびく。役僧が出て來てバルデ堂のフランスの像前に勤行を始める。祈禱文を讀む聲が斷續抑揚、かすか

に堂内にひびき返る。跪いて禮拜してをる男女の祈りの聲がつぶやく如くにきこえる。勤行の済む頃に又鐘が鳴る。瞑目黙想の後、勤行の済むだ堂に入つて先づフランスの像の前に禮し、それから今日は病床のフランスの畫を見、聖者を始め周圍の僧等が何物をか空中に望むだ様の神々しさの前に立つて、暫くして寺を出た。

寺を出ると雨の激しさ。少し雨止みを待つ間に十字の寺を眺める。その頂上の十字架が二人の天使に擁せられて嚴かに雨の中に立つ。三つの入口の上に彫つた十字架の威光の浮き彫も雨にへだてられておぼろに奥ゆかしく見える。雨の小止みを待つて狭い町を堂母に行つた。此處にはまだこの祭日の勤行がついで、堂に入るとオルガンが堂内にひびく、コーラスが之に和する。信心參詣の人や見物がごらく往來して騒しくはあるが、一つ今日の復活祭の音楽をきくために椅子に憑つて目をつぶる。始めは群集の騒々し

いに多少氣をとられたが、音樂の進むに従つて、心はその方に集中し得るに至つた。パソンの豊かな太い聲が遠くに響き息んで、暫く無聲の後にコーラスの微かな始まりと共にアルトの音が天上から下つて来る。その間に起る役僧のメス、次いでリタニの誦讀、ついで又オルガンに聲樂。パリの聖ユスターシ寺に降誕祭の中宵の音樂をきいてその始めを迎へた春を、こゝフレンツの堂母に復活日のメスで完成した思ひがある。

今日は群集の中に在つて而かも獨坐三昧の中に音樂をき、得た。音樂の力もあるが、又佛陀の教に基く多少の修行も、この面白い經驗をなさしむる原因である。「比丘よ、汝等樓閣に在つて先づ樓閣を空うせよ。樓閣を空うして後樹林を空うせよ。樹林を空うして後大地を空うし、此くして無量の空に周遍徹透せよ」との教は特に今の騒々しい世の中に住む我々に必要の修行である。心は世の騒ぎに

亂されて、用のない事に引かれ、害のある事に奪はれる。今のこの堂母の中でも、いくら人が居つても人が騒いでも自分には何等の關係もないに、その方に心が引かれやうとする。それを制して樂聲三昧の樂みを得たのは佛陀の教訓に感謝しなければならぬ。堂を出て町の人ごみの中にも此く思ひつゝ、宿に歸り、室に入つて靜坐すると、今日の朝の鐘の音から十字の寺のメスや、堂母の音樂が尙耳にひびき、心に澄み亘る。昨日は終日眼の人になつてくらししたが、今日の半日は耳の人になり得た。

かくして靜坐する中に、中食の鈴がひびく。又食事の時間が來たのか。食事のために人間がどれだけ苦勞する事か。食物を減しても活きられる様の工天が出來たらどんなによからうと考へる。昨夕はおそくまで手紙書きをしたのでねむい。食後ひる寢をして眼がさめると三時。午前の空にひきかへて空ははれ、日が照らし

てをる。河を渡つてカルミニチ(Carning)の寺に行く。そのブランカッチ堂(Cappella Brancacci)の壁畫はマサッチオ(Masaccio)とリッピ(Lippi)との作で、今度の畫の斷食に取り除けにしたもの。或る美術史家の言では、この堂の畫はルチサンスの管鑰である、そのみならず、常々その寫眞に親んで楽しんで居た作であるから、尙一度見に行つた。右の柱にある使徒ペテロが天使に助けられて牢獄を出る畫の如き、天使の神々しい上に一種の力をその口つきに表はし、ペテロの態度も逃げる人の如くでない。奥の方にある畫で、ロマの貧民に布施をしてあるくペテロの威儀堂々たるのも、實に筆つきのたしかかな事を示してをる。それ等よりも大幅で、ペテロが子ロの糾問に答へてをる處や、衆人の中で死者を活かしてをる處など、中心の人物の重みは飽くまで保つて、而してその周圍の人々を配合した點は申分ない。ペテロを圍み、その死者を活かしたのを驚いて見てをる衆人をば、顔つきばかりで

なく人種までを一々特徴のある筆で書き分け、それが一つにまよつてをる。この人物は數をよめば二十幾人しかないが、一寸見ると如何にも群集に見える。筆に一種の魔力があり、配合案配の要契を得たゝめであらう。但アンジェリコを見た眼で見ると、此等の畫に何となく飽きの來る點がある様に考へられた。色合が一體に焼けた様なのは別にして、筆のやり方も線の工合、色の種類も一見してはさうちがはぬのに、何故にこう違つて見えるか。不思議に思つて、問題のとけるまで見やうと坐り込んで見たが、どこと指して云ひ得ぬ。配合の複雑なのは別にして、簡單なものに就いて熟視して、アンジェリコと比べて見やうと思つて、上に云つた外のアダムとエワとをも能く見たが、一時間餘見たゞけでは先づ影の工合かと考へられる。マサッチオ等はどうか影を黒くする事を知り始めて、こゝには影がある、或はあるべきと思ふ處に一々正直に影をつけたのでなからう

か。ジョットーは固よりアンジェリコも光の濃淡はよく分けてをるが、それに影を使ふといふよりは色の濃淡、刷毛の向きで光り案配を表はした、それ故光線が清くて色合が透き徹る。それに反して此のプランカッチ堂の繪には黒い影を使つた、めくどくなり、物質的に(又は寫實的)になりすぎる傾向を持ち始めたかと思へる。ラファエルなどにも已にこの弊があるかと思へるが(記憶に訴へて)コレッジョやピントリキヨには餘程この弊が出たと、今このプランカッチ堂で氣が附く。日本畫を變化して陰影をつけやうとする人など、此の點を三省してほしいものである。

アンジェリコに比べればこそ此くは云ふが、此處の畫だけとして見、又はラファエル以後の人等に比べると、此の二人の名工は實によく使徒ペテロを畫いた。これだけの誠と腕とがあれば人は不死である。色々考へて坐り込んでをる間にイギリス人の老人で此も坐り込

んでをつた人が、イタリア語で話しかける。日本畫と比べてはどうかなど色々云ふから、こちらにもイタリア語で答へやうとあせるが中及ばぬ。まご／＼してをるので、それなら英語はどうかといふから、英語なら結構だといふと、さうか、それならわしも英語の方が樂だといふ。面白い老人で畫論や旅行の話をして、一緒に寺を出て別れた。

寺を出てから一人でピツテ宮殿 (Palazzo Pitti) の前に出る。その結構の豪宕壯大、今更の感がある。やり方が豊太閤に似てをるやうに思はれる。日本の美術史で室町と桃山との二時代は云はゞルチサンスの時代である。その室町のルチサンスは戦亂に亂され、桃山のルチサンスは徳川の凡俗世界に壓倒せられた。ピツテの宮殿を見て、豊太閤を忍び、このフランツェに居つてルチサンスの事を考へると、桃山時代の末路が惜しくてならぬ(然し今度のフランツェ滞在には

ルチサンス斷食であるから、それだけにする。ピツテ宮殿の横をくゞつてその後のボ、リ園に入つた。少し高見に石の階段の座席になつてをる處にかけて見ると、丁度シプレスの木立とピツテ宮殿の莊大な構へとの間にフレンツェの町が少し見え、その間に堂母と鐘樓とが聳え、その先にはフエンソレの丘が遠く見える。フレンツェの最も適當な縮圖はこゝにある。シプレスが代表するこのアルノ谷、フエンソレの山の天然、それにルチサンスの原動力であるピツテ宮殿信仰と熱誠との表はれである堂母にジオットーの作の鐘樓、それが此處に一つに集つて適當な一幅の畫をなす。

尙庭をあちらこちら、木立の間を出ては泉水に沿ひ山を登つては石像の前に出る。城壁の一角である高臺に上つて四方を見ると、後にはオリツの林にシプレスの並木。その間の別莊家々、遠くサンミニアト(San Miniato)の寺の白大理石まで、別莊つゞきの樂天地。前はフ

レンツェの町、その下に夕日に光つて遠く西の山の間に入るアルノの河。いくら書いても此の景は盡きぬ。京都の山川に似て而かも一層延びた氣象がある。

此の高臺を一角としてこの広い庭園のぐるりに城壁を築いたメデチ家の威勢豪華、今残つてをる宮殿や寺院だけで見ても想像に餘りある。ピツテの宮殿のみならず、フレンツェの町の處々方々に、その七曜の紋所、百合花のしるしが残つてその古を語る。然しメデチ(Medici)家は今は亡びた。宮殿は繪畫の陳列場、紋所は只の紀念。かく思つて庭園を下つてくる。道ばたの青芝原にマルゲリテの花が白く咲き亂れてをる。

七曜の紋の光りうせ、

時かはり世はうつりても、

ひかしながらの春は来て、

園生にはさく星の花。

庭を出、河を渡つてフレンツェに歸つた。古橋(Ponte Vecchio)の上に

立つてアルノの流れを眺める。悠々の流れは紅に、西の空には夕日
が丁度嵐景色の雲に入りかけて、その光が亂雲の間に奇妙な光輝を
残してをる。

四月二十日。

フエソレの丘、聖十字。

今日は復活の月曜日、キリストがその弟子と共にエンマウスに行
つたといふ日。早くおきてフエソレ(Friesole)の山に上らうと思つて
居たが、やはり餘り早くは起き得ないで、宿を出たのは九時。電車で
フエソレに向ふ。市中は車がゆつくりのつそりと行くので、軒の深
く出た宮殿や彫刻のある寺や、色々見物が出来る。市中を出て、路は
段々の上つてオリグ畑の丘に上る。家に隠れて居た堂母や鐘樓は
巖として、フレンツェの町の中央に立ち、河南の丘陵には宮殿、別荘、寺院
が木立の間に文をなす。どこの高見から見ても同じ景色ではある

が、又他かぬ眺である。丘を大分上つて、山頂のフエソレの家々が直上
に見える所に一群の家。その大部分はドメニコ派の僧院で、こゝが
ドメニコ派の一時この地方の本據であつた院、又アンジェリコがフレ
ンツェに移る前、十八年居た僧院。入口の鈴を鳴らすと戸が開いた。
うす暗い廊下を行くと、黒白のドメニコ派法衣を着た僧が迎へて、畫
の見物かと問ふ。案内せられて僧院の會堂に這入る。色々の畫を
見せやうとするから、アンジェリコだけでよろしいといへば、その像の
祭つてある小御堂につれてくれた。アンジェリコは此の院に住んで、
十八年の間殆ど世に交らずに只信心をこらし、想を練つて、神から示
されたと思する光景を畫にした。その數も多かつたが、他に移つた
り、亡くなつたりして、今は只一幅残つてをる。然しその一幅にも畫
聖の信念は隈なく現はれ、その筆は多少の修補を経たながらに保存
されてをる。先づ堂に入り、參詣の人が跪いて祈りをする椅子に腕

をついて、跪拜の姿勢でその聖母を見上げる。手に持つ紅白の花を
 兒に示して、清らかな愛情の眼で兒を見つめる母。その母に抱かれ
 て両手で花を取らうとする可憐の兒童。後からそれを圍む六人の
 天使、前に跪いて花を母子に捧げる二人の天使、共に五彩とり／＼の
 翼美はしう、各尊信感嘆、讚仰、敬愛の情を色々に現はしてをる。その
 両方には四人の聖者、端嚴の姿に歸敬の情を現はし、至信の眼を注い
 でをる。背景には二つの窓が開いて、遠く丘陵起伏のこなたに水田
 の水青々と、その間の木立が水に映る。虚空や山水と聖者の光輪と
 相隣つて、世界の淨い碧色と天上樂國の金色と一緒に完全な調和を
 作つて、神子聖母の邊りを圍む。清淨の天地と寂光喜樂の一室と、こ
 れ程の調和を見た心眼、これだけの神々しさを色と形とに表らした
 た筆。その作者が「天使に交はつた人」と呼ばれたのは無理でない。
 サンマルコでも已にその人の神に近い精神を見はしたが、この作に

對して、又新に、又一層深くその人の徳を想像する。アンジリコは宗
 教畫、肖像畫だけでなく、山水畫でもイタリア美術の基本を据ゑたと
 いふ言は、この畫の背景で見ても眞と感せられる。仰ぎ見て感嘆の
 情に打たれる。あたりには何の聲もなく、僧院の寂靜と、丘上の天然
 と共に一つの別世界を作つてをる。この天地に信神の生活をした
 アンジリコでこそ始めてこの作が出来ると思はれる。

拜壇前の椅子から立つて後を見ると、案内の僧が退屈さうに待つ
 てをる。氣の毒と思つて、一時間はこゝに居させてくれといふと、よ
 ろしいといつて腰にかけた鍵の音をさせてあちらに行つた。全く
 一人で此の畫と對して横から見、前から見る、母子の至情、天使の容貌、
 天衣の色合、それから四人の聖者の姿、顔つき、眼つき、見るに従つて新
 しいものが見える。天使の各の顔つきや表情が特色を持つて、而か
 もそれ等が集まつて一つの神徳讚美になつてをる事、聖者の中、特に

使徒ペテロの思慮深い眼附に、奥深くて而かも鋭い表情を蓄へてを
る事、殉教者ペテロの謙遜して、自ら棄て、キリストを禮する態度、十
四の光輪の配置、見ても趣がある。尙光線の工合をかへて見や
うと思つて向ひの窓かけを下ろして見た。僧院に歸つたと思つて
ゐた番僧がどこに居たか、この音をきいて出て來た。今まで待つて
をつたかと氣の毒であつたが、愛嬌に畫の縁にある聖者は誰れかと
きくと、それはジョットーの作だとは知つて居るが、何れの聖者が知ら
ぬ。光線をかへて尙前に立つ。番僧は畫の前にあつた十字架を下
ろして障りなく見える様にしてくれた。親切はよいが、如何にも尊
敬なしに十字架をとつて、横に突きやつたには大に興がさめた。
尙瞑目してよく印象を繰り返し、目を開いてよく見て、禮をして堂
を出、番僧には禮の料をやつて寺を出た。出ると周圍は又天然の美、
オリヅの畑が盡きて、別荘風の家の石垣の間の石道を山に上る。上



フ・エソンの聖母（アংশエリコ原畫）

つて道の一角、シブレスの並木の下に眺めが開ける。今まで心のこもった畫に集中した眼を見はらしに散らすのも惜い様な氣もするが、天然の宏濶な眺めもすて難い。木立の間の花の木、草原の小な花のしとね、開けたアルノ一の弘い眺め、此も五百年の前には、我がアンジエリコが朝夕に眺めた景色。この山の草花一つでも、彼れはその中に神の光榮を見て、院に歸つては又繪の具と刷毛とでその神の光榮を畫いたであらう。さう思へば天然と畫とは別のものでない、見様一つ、見る心一つで、天然にも畫にも同じ美はある、同じ教訓はある。メデチ家の古の別荘、今は誰の住家か、眺めのよい一角に、高尚な家造り、門の扉の師子像も閑雅の趣がある。段々上つて終にフケンソレの町。寺の前廣場、その横を上つてフランシスカン派の僧院の方に行く。その石道の上り盡した角にシブレスの木が二本、その下にある石の椅子によつてフケンツの一體の眺めは又格別。道で見た

と同様の眺めではあるが、それが尙一層弘く見える。山と山と相迫つたアルノの河端の、この一都會。聳える堂母や、鐘樓や、政廳の塔ばかりでなく、一群かたまつた赤瓦の屋根の數々の下には、今も尙世界の珍寶が澤山集つてをる。幾百年の前には此の一つの町が文化の中心になつて、あの屋根の下には世界の幾千萬の人心を支配した千古朽ちない色々の方面の偉人が朝夕を送つて居たのである。四方山に圍まれたアルノの河端の町と野との眺めは、單に天然の眺めでなく、實に人類の光榮を包含した眺めである。フオラの都、花の里、人間の花の咲いたその跡が今眼の下に集ると思へば、山の上に西風に吹かれて、しよんぼりと、茫然とこの眺めに氣を取られてをるこの一人の人間もうつかりすべきでない。

その角から少し上つて山の頂上にフランシスカンの僧院がある。その前の草原に坐つて東北の山を見る。フオソレの町の下、山の崖

に據つて築いた古ローマ人の芝居の跡の石段や、石のアーチが脚下に歴々と見える。芝居の跡のみならず、この僧院も古ローマ時代にはカピトルがあつてジュピターを祭つた處とか。古今の變を思へば、人生の流轉が又心に染む。僧院の會堂に這入ると、祈念沈思の僧が二人。靜かに帽と杖とをおいて、自分も椅子にかけて、フランシスカンの褐衣の僧と共に同じ堂内に黙想する。靜かな山頂の僧院で三昧、身は今の世界を忘れ得る。凡そ人間の生活にとつて沈思黙想、禪定三昧は非常の力、大切の勤行である。日本に居ては却てその機會を逸して、イタリアでこの勤行をする、此も聖フランシスの賜である。文明とか競争とかいふ世にも、自分は固より、世人も此の三昧定を怠らぬ様に勉めたいものである。

黙想に如何の時を経たか、再び世に歸つて僧院を出る。その前の草原に色々の花が緑の中に咲き亂れて、アンジェリコの畫いた告示の

畫の春の野そのまゝ。聖フランシスが萬づの色千々の草に咲く花と詠じたのも此の花。フエソレの紀念にその色々の花をつむで手帳に收め、元の道をフエソレの町に下りた。見はらしのある宿で中食をして、尙食後庭に出てカフェを飲みつゝ、フランツェの萬家を眺めて色々の感慨は盡きぬ。世界は弘く町は多いに、何故にこゝが特にかくまで詩と畫との花を咲かしたか。このフエソレにしても下のフキレンツェにしても、今の人間はそれ程にもないに、又古と雖も固より悪人もあり、賤民もあつたにしても、どうして、十四五世紀に一時にこの地に偉人天才を輩出したか。その名残が今の惡世にも盡きず、アメリカ人まで此の地に來て當時の遺物を見る様になつたも不思議。天の配劑といつても不思議は盡きぬ。

宿の前から電車で山を下る。メデチ別荘の下も過ぎ、ドメニコ僧院も過ぎた。これからゆつくり眠らうと決心して眠入り、眼がさめ

ると、電車の窓には堂母の壁が聳えて見えた。

それから直に十字の寺に行つて、今度はバルデ堂の隣りにあるジotto筆の兩ヨハ子傳を見る。洗禮のヨハ子の誕生、その父の喜び、驚き、その母の死、最後にヨハ子の首を皿に盛つて父の前に出したサロメの跳り。ジottoにはアンジリコと趣を異にした戯曲的の配合が見える。色はアンジリコの如く花やかでなく、一つ一つの人物や表情はまだアンジリコの如くに妙境には入らないでも、その配置の才、活動を表はす活きて而かもしまつた筆、何れを何れとも優劣をつけるなど、却て愚であらう。

特にサロメの舞はそれ一幅の中に一大戯曲を具へてをる。王者の威儀を崩さぬヘロデ王も、皿に盛つた首には辟易しやうとする姿。その横の老人の驚愕に對して樂器を奏する兒童の無心。反對の方にはリラを手にして、父の顔を注視し、炎ゆる情を抑へて直立したサ

ロメ。その後には、この場の光景に膽を失つた侍女二人の相擁して、皿の首と王の顔とを睨んだ姿。それ等が一つの曲に結ばれた、一點のゆるみない配置は實に偉才の筆の跡。

洗禮のヨハ子と反對の壁には福音傳記者のヨハ子。上はその默示録の示現、中はヨハ子の死人を活かす奇蹟と、最下はその死後の復活昇天。此等の作を見るとブラシカッテ堂の畫家が如何に先輩に負ふ處があつたかを知るに足る。人の群集の配合など、ジオットが已に此處に立派な手本を示してをる。

ヨハ子の昇天は、キリスト教の攝取來迎の信仰をよく畫き出した。ヨハ子の棺を納めた家の内、一方には棺の蓋のあいて中が空なのを見てをる一群の人、他方には同じく屋根の下ながら、何か空中を見て訝り眺めてをる人々。その二群の人々の態度、姿勢、表情、配合は一々述べない。この二方の中央にはヨハ子の身が漂として中空に浮び、

両手を舉げて天上に向つてをる。その左の手を握り、將に右の手をも執らうとするキリストが聖者と共にこの昇天の人を迎へ取る。已にキリストに握られたヨハ子の左の腕は如何にも、そのつかまへ處を得た様に延びて、その手先は軽く柔に垂れて、握られた手先には最早力を入れる必要がない。之に反して延ばしかけた右の腕はまだ十分に延びてキリストの左手に届くには及ばないが、その手先には力が表はれて、今將に他にすがらうとする態度を示す。左の手は已に他力の信仰に入り、右は自力から他力に移らとして居る。之に對してキリストは空中で身を前に傾け、兩腕は飽くまで延ばし、兩の手先には力を入れてヨハ子を迎へ取らうとする。茲に攝取の力、引接の慈悲が十分に見える。キリストの後に重なりつた諸の聖者は、皆共にヨハ子を迎へて聖衆の仲間を引き入れやうとする。ヨハ子の身はキリストの光りに包容せられ、圍繞せられて、足は已に地

を離れ、信賴の眼は天上に注いでをる。日本の佛畫にも來迎の佛陀聖者は多く、特に源信僧都などの名畫もあるが、その佛は靜かなおちついた引接の佛である。ジョットーはこの同じ信仰を極めて形體の活動に現はして、而かもその神聖さを失はぬ。源信僧都の來迎は佛陀を主とし、ジョットーのは攝取せられるヨハネの信仰を主としてをる。彼には寂靜の威嚴があり、此には熱烈の欣喜信仰が表はれて、何れを何れとも棄て難い作。一つの筆の跡に此く攝受と信仰との合一を示す力は驚くべきものである。

尙一つ此の畫で、ジョットーがキリストや聖者の空中に現はれた様を面白く畫き出した工合は注意に値する。そら一面の碧色の中に白黄の雲とも空とも分からぬ處が出來て、その中からキリストや諸聖衆が半身を出してをる。云はゞ碧空の青雲が破れて、天上の淨光界がその破れ目から見える。そこにジョットーは所謂青雲に厚

サロメの舞(ジョットー筆)



(一二五頁参照)

聖ヨハネの昇天(同上)



(一二七頁参照)

さをつけて居ない。それだけでは何でもない様であるが、之をラファエルの聖セチリアに比べると、その間の差違が明かになる。ラファエルの先にはポロニヤの博物館で見た如く、青雲に厚さをつけたため、その割れ目がいかにも割れ目に見え、その先の天上界に一定の距離をつけてしまつた。つまりラファエルの書き方では天空の青雲を物質的にしたため、その先の天界も物質世界のつゞきに見える。ジオットーはそれを理想的にして、青雲でない碧空の無限、その中に漂渺と表はれた聖者の天界を畫いた。畫才はラファエルの方が勝つてをるにしても、理想を見る眼はジオットーにある。

此等の畫を見、先づ此を名残に十字の寺を出た。その正面の白い大理石を見返つて別れを告げた。

それからは丘の上のアンジェロ高臺に行き、サンミニアトの臺に上つてフランツエの町を見下す。市街の中央に屹立した堂母と鐘樓と

の姿はいつも威儀仰ぐべきであるが、聖十字の寺の壁や屋根を見ては、あの小さな建物の中にジョット！の形見のみならず、アンジェロ始め偉才の骨が多く納められてあると思へば尊い。

夕暮の風吹に、ミアトの前から丘の上の道を散歩して、邊りの木立、四方の山々の暗くなり始めるのを見て宿に歸つた。今日の一日も亦有益にくらし得た。

四月二十一日。 聖母像の数々。

今日は美術學校 (Academia) の陳列室で一日をすごした。開館の前にサンマルコの寺にあるジョットーの有名な十字架を見に行つた。考への出る程長く見ないでガレリーに急いだが、尙師匠チマブーの風が多く残つて、古のビザンチン美術掉尾の作と見るべきものと考へられる。

アカデミーでは直にアンジェリコ室に入つた。壁に列る澤山の細畫、有名の最後裁判など目が眩する程にあるが、人の多く這入つて來ない中の室の聖母から見始めた。板に畫いたこの時代には壁畫の外は板方十尺以上の大幅、破損がはげしくて元來の美しさは見られぬが、錦の掛物かけた椅子によつて、聖母と聖子とが八人の天使、八人の聖者に圍繞せられてをる。その背景はおつびらいた夏木立の林で林と聖者との間を幔幕が隔てゝをる。フカエソレの聖母と大體の結構を同じうはしてをるが、全體が彼れよりも打ち開いて運動が多い。天使も彼の畫に於ける如く信敬禮讚に集中しないで、多少各自自由の態度を執つてをる。彼れにはひき締りがあつて筆つきも謹嚴であるが、此は開濶で筆も變化を示してをる。背景の木立で見ても、初夏の天空の調子が全體を一貫して、上にかけて薔薇の花輪も祭禮の飾りの如く見える。それ故他と區別するため、自分は此の畫番

號は二百八十一號を五月の聖母と名づけた(この畫の陰影や何かに
ついでの考は略する)。

五月の聖母から轉じて、次の室の二つ同様の配置の聖母に移ると、
筆つきの違ひが著しく目につく、此の違ひはアンジェリコの技倆の
發達の結果であらう。その二つは二百二十七號と二百六十五號と
で、多少の差はあるが、細畫の風を脱せず、サンマルコの壁畫の様な氣
力がない。保存はよくて色もよく分かるが、共に色が浮いた方で、二
百二十七號の聖者の衣紋など、平面になつて奥行が少く、聖母聖子を
始め人々の頬の赤さなど、つけた如く見える。いくらアンジェリコ
でもその初期にはまだ前代の風、特にチャプの影響を脱せず、又自分
の従事して居た細畫を延ばしたばかりの様な筆つきで畫いたので
あらう。

この畫の聖子は手に柘榴を持つてをるから「柘榴の聖母」と名けや

うが、二百六十五號の「石塚の聖母」此も自分の命名になると、同じ様で
も發達の跡が見え、赤頬は自然の皮膚に落ちついて、天使二人の信仰、
聖者六人の態度も、よほど集中して來てをる。特にこの聖母の顔容
はフエソレの聖母と同一の風で、母としての表情、處女の純潔の情が
よく見える。但聖子は母に抱きついた姿勢のみならず、その顔容も
只あどけない可愛い子で、サンマルコの廊下のパンピノの様な威儀
がない。然し此も此畫の一特色として見るべきであらう。背景の
石塚の先は茂つた木立で、若しこれをおつびらいたならば、五月の聖
母に似たものになる。研究して、「柘榴」「石塚」「五月」が年代相つぐもの
となれば、フエソレの聖母は此等を集成したものと云ひ得やう。然
し美術史家の考を一々調べて見る暇もない。

「柘榴」と「石塚」との間に「錦袍の聖母」此も假の命名で、番號は二百四十
がある。椅子にかけた巾が錦襦であるのみならず、聖母の衣服もバ

ンビノの着物も錦襦の縁をとつてある。聖母が聖子を注視した力のこもつた眼附、聖子が嚴然と立つて、智慧の眼光を放つた點、それに外部の裝飾を合せて見て、アンジュリコは茲に威儀のある聖母を畫いたと信せられる。愛情よりは寧ろ威嚴を表はし、奥深いといふよりは寧ろ立派な作である。アンジュリコは蓋し教會の權威を心において、その信仰がこの聖母子となつて現はれたのでなからうか。此の畫をサンマルコの三十一號僧房にある名高い細畫の聖母子に比べると、彼れには母子の愛の外に殆ど他の含蓄がないに反して、此は母子の間に一つ大きな自覺、自尊の心を貯へてをる如く見える。而して母子のみで他に聖者も天使もない點は同じである。然し此の點でも二つの畫に面白い對照がある。サンマルコの細畫には金色燦爛の縁に可愛い天使を畫いてあるに反して、この錦襦の聖母像の上には上帝を父として、その半身が現はれて母子を祝福してをる

小形の畫がついてをる。此の附屬畫の差異で見ても、一つは愛情、一つは威權といふ解釋は誤らないと信ずる。何れにしても、アンジュリコは多くの聖母子を畫いて聖母の人格にも、又その子に對する態度や、その周圍の光景にも種々多方面の信念を、各それに應じた聖母に現はしたのである。彼れ自らはその一々の作を畫く時に、こればこうあれはあゝと區別し分析し、又比較案配したのではなからう。然し彼れの不斷の信仰は、折に従ひ機にふれて、聖母の理想に含まれた各種の方面を見て、その一つを捕へた時には、之を神の示現として、その方面に信仰を集中し、その結果を畫き出したに違ひない。畫工として技倆の進むに従つて、この信仰集中が意の如く筆に應じて現はれ、この様に各種の特色のある聖母像を畫き出した。アンジュリコの偉大なのは茲にある。ジョットの聖母チマブーの聖母が稍ともすると典型にはまると違つて、アンジュリコは

信仰理想の中に活きた聖母を表はした。信仰の上からいつても、彼れは教會、特にその屬したドメニコ派の忠實の信者で、神學や宗義について疑つた事もなく、考へた事もなかつた人と見える。然し彼れは宗義や理論以上に信仰の活きくした力を貯へてをつたから、今までの典型のまゝの聖母を繰返すのでなく、自分の信仰から盡きない材料を得、變化しても而かも放縱にならない發表をした。此の點から見れば、畫僧アンジエリコは又信仰靈界の偉人、自由活動の人であつた。活きた信仰の不涸の源泉が道徳と流れ出れば、聖フランシスの人物が出来、美の精神に發表すれば、このアンジエリコを生ずる。

この室にキリストを十字架からおろした景がある。何よりも彼よりもその彩色の美しいので、眼につくが、只彩色だけでなく、よく見ると、人々の表情に各特色を持つて、その色彩の陸離と相應じてをる。單に悲んでをるのもあれば、右の端の婦人、悲中稍情を制したのもあ

り(その次の婦人)已に信仰歸服の眼にキリストの傷を見てをるのもあり(中央の聖母とその左の老婦人)あきらめの情と共に慕ふ情を表した婦人、この十字架の神祕を語るらしい二人の男子、その他の舉動にも各特色がある。但しこの畫はその色合の所謂極彩色、風に塗つたので、稍力に乏しく、その上細畫風に事件の説明の如く、キリストの頭から足先までに人々が散在して、思ひくゝの態度をとりすぎてをる。この點からいふとサンマルコの二號僧房の十字架おろしの方が遙にしまりがあり、力がこもつてをる。

その他この室の名物、最後の裁判や、細畫のキリスト一代記などに關しては、中食のすき間、人の居ぬ間に巡見したので、數十の細畫を一よく見得なかつた故、多少細畫に關する考へも生じたが、今は略する。

今度は奥の方のトスカナ派の室、そこに一つアンジエリコ的大幅、此